

平成 19 年新潟県中越沖地震
新潟大学学生ボランティア本部『ボランち。』
災害ボランティアコーディネータ
活動報告書

～ Web 版 ～

平成 19 年 12 月

この報告書は、Web ページに載せるため、正規版に改良を加えたものです。
(著作権等の関係上) 正規版は、新潟大学学生ボランティア本部『ボランち。』
にて、配布しております。また、メール等での郵送受付も行ってあります。

新潟大学学生ボランティア本部

はじめに

この報告書は、平成 19 年新潟県中越沖地震における、新潟大学学生ボランティア本部『ボランティア。』のこれまでの活動を一冊にまとめたものである。ボランティア。のスタッフが何を思い、何を考え、どう行動したのか。この報告書の作成を通して、これまでの活動に対する反省をするとともに、今後どのような活動を展開すべきかを、改めて考えることができた。また、この報告書を基に、学生によるボランティアコーディネート組織を新たに創ることができるよう、私たちが活動の際に活用した資料やフォーマットも最後にまとめておいた。参考にさせていただければ、幸いである。

今回、報告書という形でまとめたが、中越沖地震に対する私たちの活動は終わったわけではない、ということを強調しておきたい。本日の報告会が一区切りでもあり、また新たな一歩を踏み出すスタート地点でもある。

また、この報告書に対するご質問・ご意見等も大歓迎である。皆さまからのご意見を基に、私たちの活動をより良いものにしたいと考えている。

最後になったが、この報告書を作成するにあたり、協力していただいた関係者のみなさまにこの場をお借りして、御礼を申し上げる。

もくじ

| | | |
|----|-------------|----|
| §1 | 2 回目の大地震 | 1 |
| §2 | 何が起きているか | 7 |
| §3 | とりあえず現地に行く | 13 |
| §4 | 後方支援の大切さ | 45 |
| §5 | 新しい顔 | 61 |
| §6 | そして、これから | 71 |
| §7 | 一緒に活動した道具たち | 75 |

§1 2回目の大地震

新潟県中越沖地震概要
災害シミュレーション概要

新潟県中越沖地震

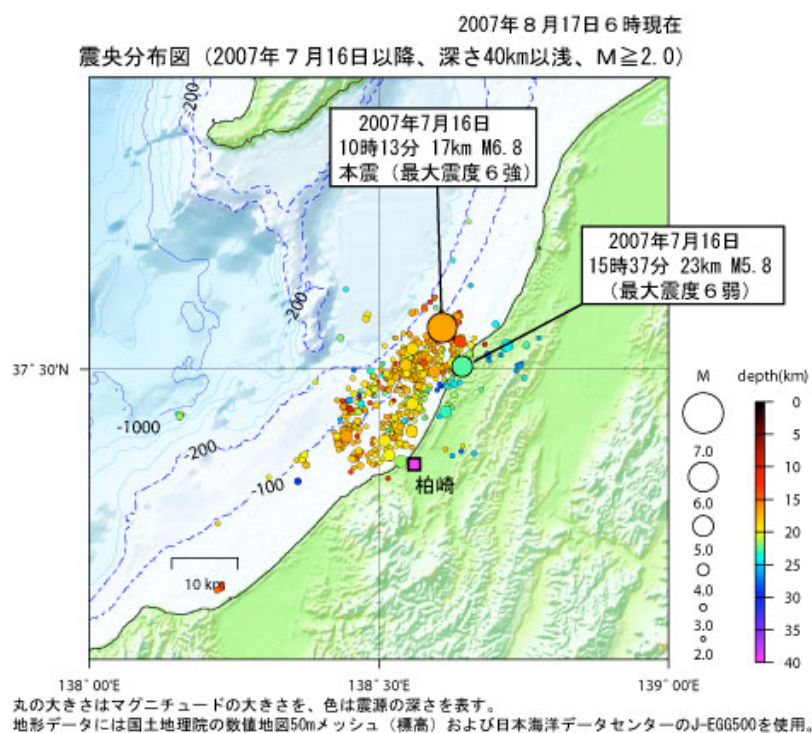
■概況

平成19年7月16日10時13分、新潟県上越沖の深さ17kmを震源とするマグニチュード（以下Mと記述）6.8（暫定値、以下同様）の地震が発生し、新潟県長岡市、柏崎市、刈羽村と長野県飯綱町で震度6強、新潟県上越市、小千谷市、出雲崎町で震度6弱を観測したほか、北陸地方を中心に東北地方から近畿・中国地方にかけて震度5強～1を観測した。

この地震により柏崎（国土地理院）で32cm（10時22分）、小木（国土地理院）で27cm（10時33分）など、新潟県を中心に秋田県から石川県の沿岸で津波を観測した。なお、地震調査委員会によれば、柏崎（新潟県管轄）で高さ約1mの津波を観測した。

この地震により新潟県を中心に長野県、富山県で被害が生じた（死者11名、負傷者1,985名、住家全壊1,024棟、住家半壊1,441棟など；7月30日16時現在；総務省消防庁災害対策本部による）。

気象庁はこの地震を「平成19年（2007年）新潟県中越沖地震」と命名した。





●主なライフラインの被害状況

電気 最大停電 35,344 戸
 都市ガス 最大停止 35,150 戸
 水道 最大断水 61,532 戸

●避難者状況

避難者 最大避難者数 12,483 人
 最大避難所数 116 箇所

8月31日をもって全避難所閉鎖



●道路の被害状況

| 災害状況等 | 延べ通行止め箇所数 |
|-------------------|-----------|
| 土砂崩れ | 9 |
| 路面陥没・路肩決壊等 | 12 |
| 事前通行規制（構造物倒壊の恐れ等） | 4 |
| その他（家屋倒壊等） | 4 |
| 合計 | 29 |



【参考】

気象庁 HP 平成 19 年(2007 年)新潟県中越沖地震の特集
 新潟県 HP 平成 19 年(2007 年)新潟県中越沖地震関連情報

災害シミュレーション

実は新潟県中越沖地震が起こる直前、我々は次の災害に向けて、シミュレーションを行っていた。

■目的

災害時は時々刻々と情報が変化し、それとともに素早い対応が求められる。いざというとき災害発生時に瞬時にどう動くか、そのための事前準備として今何ができるか。この2点を明確にするために行った。この2点を明確にし、災害時スタッフマニュアルを作成し、瞬時に迷わず行動できるようにすることがこの活動の目的である。

シミュレーションは3段階に分けて行う事にした。

①第1回災害シミュレーション

…大まかな災害時のスタッフの活動の流れを確認する。

②第2回災害シミュレーション

…さらに細かい点のチェックを行う。

③第3回災害シミュレーション

…これまでの2回のシミュレーションで作成したマニュアルを用いて、実際にマニュアルに沿った緊急体勢をとることで、マニュアルが機能できるかどうかを確認する。

■第1回災害シミュレーション

新潟県三条地域で水害が発生した仮定のもと座談会形式で以下の5段階に分けたミーティングを行った。

①新潟県三条地域で水害が発生と仮定

②災害情報等をどこから集めるか。

…現地で学生がボランティア活動ができるか。道順公共交通機関、一般車道はどのようになっているか、現地に気象警報

は出ていないか、現地の活動で気をつけることは何か、等、学生のコーディネートにおける必要な情報を速やかに収集、整理しなければならない。この情報源を予め見つけておき瞬時に対応できるようにするための段階である。

③被害の予想と話し合い&実際の 7.13 水害との照合。

…被害を予測することで、現地での活動の危険性や、必要な支援もある程度分かってくる。また、かつての 7.13 水害との被害の照らし合わせをすることにより、予測できなかった被害についてもフォローする。実際の災害と、予測の部分での違いを明らかにし、実際の災害の恐ろしさを認識する段階である。

④ボランち。がどう動くかを議論。

…以上を踏まえた上で、ボランち。に具体的にできることは何か、どのように学生をコーディネートするか話し合う。

⑤自分個人がどう動くかを議論。

…ボランち。の具体的な活動のなかで、自分にはなにができるかを考える。

⑥シミュレーションを通して今なにを準備しておかなければならないかを議論。

…ボランち。の具体的な活動を災害発生時に瞬時に行動に移さなければならない。このための事前準備として今からできることをはっきりさせ、活動を開始する。この活動の成果を次回の第 2 回災害シミュレーションミーティングで発表、活用できる形にする。

■第 2 回災害シミュレーション

村上で震度 6 強の地震が発生した仮定のもと座談会形式でミーティングを行った。今回は第 1 回災害シミュレーションミーティングで決定した各班の事前準備の中間報告を行い、具体的な各班の活動についての確認を行った。不足な点を明確にし、災害時スタッフ対応マニュアルを完成することが、今回のミーティングの目的である。

班は以下の通り。

○つながり班

- ・災害復興科学センターとの連携。
- ・学務部学生支援課との連携
- ・学内他団体とのつながり

○記録班

- ・活動記録時系列シート作成
- ・活動記録
- ・災害時スタッフ情報共有サイト運営
- ・HP の運営
- ・広報誌 (PoNP) の作成・発行
- ・パンフレットの作成

○情報班

- ・インターネットのサイト一覧表作成

○派遣班

- ・「ボランティア受付シート」作成
- ・「危機管理マニュアル」作成
- ・「ボランティアの心得」作成
- ・「災害ボランティア活動の手順」作成

■第 3 回災害シミュレーション

2 回にわたる災害シミュレーションの結果、災害時スタッフ対応マニュアルが完成した。しかしマニュアルが完全に機能するかどうかは実践してみないと分からない部分もある。このため、ボランち。で仮想災害に対する仮の緊急体勢での活動を 3 日間行い、スタッフ対応マニュアルの改善を行った。

仮想災害の災害情報をメーリングリストで流し、時々刻々変化する情報に対してスタッフが対処する形をとった。今回の仮想災害は 10. 23 新潟県中越地震をもとに考えたものである。

■シミュレーションを振り返って

1日終わるごとに、振り返りシートの記入と反省を行い、次の日は反省を反映させるような行動をとるように全員が心がけた。実際の模擬コーディネートで、被災地のボランティアセンターが立ち上がるまでは学生を派遣できない。この時間を利用して、情報収集を行い、いつでも学生を現地に派遣できるような状態にしておければ望ましい。

今回のシミュレーションで作られた、記入シート、コーディネート対応マニュアル等はそのまま活用する。今後シミュレーション自体も定期的に行い、いつどこで災害が起きても即座に対応できるようにスタッフの心の準備をしていく必要がある。

§2

何が起きているか

新潟大学学生ボランティア本部は、被災地では何が起きているのかを把握するため、地震発生日の翌日からスタッフ2名が先遣隊として現地入りした。

中井 美紗

Misa Nakai

法学部 法学科 4年

2004年の中越地震の時に、ボランち。の前身である震災ボランティア本部のスタッフとなる。現在は、卒論で忙しそうにしているが、いつもボランち。スタッフの事を気遣っている。

必要とされるボランティアは
そのときによって変わります。

■地震が起こってから何をしましたか？

その日はアルバイトに行く前の時間だったので、時間までアパートにいました。揺れが始まった時は立てないくらいひどかった事を覚えています。長い時間揺れが続いていた為、揺れが続く中TVのスイッチを入れ地震の速報を探しました。また、以前の中越地震の時に「携帯電話やメールがとても繋がりにくくなり、実家と連絡が取れず両親にとっても心配をかけてしまった。」という経験があったので、揺れがおさまる前に携帯で父親に連絡を取り「私は無事だよ。」と安否の連絡を入れていました。揺れがおさまってからは「ボランち。」のBBSやメールそして電話を利用し、メンバー全員の安全確認をしました。幸いメンバーの皆も無事でよかったです。その後は大学の「ボランち。」カウンターを開け、メンバーと共に情報収集や今後どうするかなど活動を開始しました。

■どのようなボランティア活動をしましたか？

16日に地震が起こり、次の日の17日に現地まで視察に行きました。やはり現地には地震による被害がありました。しかし、写真で見た中越地震の状態と比べると被害は少ないような印象を受けました。各避難所に行ってみると、地震の翌日にも拘らず既に自衛隊の給水車や仮設トイレがあり、炊き出しなどが始まっているところもありました。ボランティアセンター（ボラセン）の準備が既に始まっており、柏崎ではもうボランティアの募集が始まっていたようです。この現地視察の目的は「現地の状態を自分の目で見て確認する」、「ボラセンに名刺を渡しボランち。を知ってもらう」、「地震による被害を伝えるために写真を撮る」などです。写真を撮る事に申し訳ないと感じましたが、この状態を少しで

も多くの人に知って貰おうと願いながらフィルムに収めてきました。

また、その2,3日後には新潟大学が刈羽村へ本格的な支援をする事が決まり、さっそく学生のボランティア第1号として活動を開始しました。活動としては、ボラセンのスタッフとして動く事が中心でした。その中でも「子ども支援」に関わるリーダーに任命され、ボラセンの運営や学童保育ボラの企画、避難所の子どもたちとの活動をしました。また、仮設住宅に行くことや、一般のボランティアへの参加などボラセンの運営と活動を一緒に行いました。

■ボランティアを通して何か気付いた事はありますか？

良い意味でも、悪い意味でも言える事ですが、「ボランティア」に対する考え方の違いを感じました。これは、ボラセンのスタッフ、一般の方々、そして学生などそれぞれに言えることです。「力仕事をやるつもりが子どもの相手だなんて…」、「私がボランティアをしなければ!」、「まあ、ボランティアに参加しておけば後々役に立つだろう…」、「私はその時に必要とされることをやろう!」など様々でした。「ボランティア」って何なのでしょうね。必要とされるボランティアはその時によって変わります。自分のやりたい事だけをやるのがボランティアではなく、もっと柔軟な考え方が必要ではないかと感じました。

■今回の活動を振り返ってどのように思いますか？

今回は「頑張ったボランティア」だったと思います。当初は2,3日の間だけボラセンに行く予定でした。しかし、この時期は丁度テスト期間と重なり、私しか行く人がいないと

いう状況でした。行かなければという責任感や、現地と「ボランち。」をつなぐ為に頻繁に通う事になりました。1ヶ月以上は刈羽村へ行ったと思います。現地との移動やボランティアの活動、学生1人でのボラセン運営、また、それが連日続いた為、精神的、身体的ともにとっても疲れていました。これらの負担が不満へと姿を変えていくことになったのだなと思います。疲れから報告書の記入が疎かになり、その為、学校で後方支援をしてくれているスタッフとの情報共有も希薄になってしまった事もありました。これらは今回の反省点と共に次回の課題だと思います。

■今後の活動予定は？

被災地も以前より落ち着いてきた為、今後は後方支援に回ろうかと思っています。現地で活躍していた「ピカピカ隊」、「ふれふれ隊」を「ボランち。」の後輩が引き継ぎました。この担当のスタッフをフォローしながら見守ろうと思っています。

また、今回も課題に出たように、さらにスタッフ同士が支え合える為に、活動を考えていきたいと思っています。

■学生や大学の皆さんにメッセージを

「やってできないことはない。」この言葉をメッセージとして贈ります。大地震があっても全国の多くの人力を合わせ、迅速に復旧作業が進んでいます。大変な日もありましたが、ボラセンへ通い力一杯活動することができました。やってできない事はありません。どうかこの言葉が多くの人に届きますように。

三木 春香

Haruka Miki

法学部 法学科 2 年

中越地震の復興ボランティアに対して熱い情熱を捧げてきた彼女。いつも、我々の 2 歩先のことを考えているアイデアウーマン。

忘れられたころに、忘れられそう
なころにですかね。もっかい、被
災地に戻るのかなあと思う。

■地震が起こってから何をしましたか？

地震が起きた時は、怖くて部屋を飛び出しました。ちょうど本棚の倒れてくるところにあるデスクに向かっていたので、携帯電話は手元にはありましたが、手に取らずとりあえず外に出ました。

その後、災害ボランティア入門講座で中越地震の経験者の方の話を伺ったときに、速報が流れるまでの間は連絡が取りやすいと聞いていたので、こちらから連絡しなきゃと思って、携帯電話を取りに戻ったんです。「大丈夫？」というメールも何通か来たので、返事をしてました。

一段落してから、ボランち。の電子掲示板をパソコンで見たり、どんな地震だったのかを気象庁のホームページで見たりしてました。まさか、新潟でまた起こると思っていなかったもので、関東とかが震源地の、ものすごい大きな地震で、こっちまで揺れたんだと思いました。だから、「大丈夫だよ」というメールではなく、「大丈夫？」というメールをしました。

ボランち。のメーリングリストで集合のメールも来たんですけど、体調が悪かったので、外に出られませんでした。でも、情報は自分で調べようと思って、消防庁の災害情報、被災情報の PDF を見ていました。割と更新されるのに、バックナンバーが残らないんですよ。「どれくらいのときに、どれくらいの被害状況なのかわかるといいね。」と、藤本さんが言っていましたし、1 日分だけはバックアップを取ってあります。

■どのようなボランティア活動をしましたか？

はじめに現地に行くというお話をいただいたのが地震の日の夜です。宮崎さんから連絡がありました。「お前、明日行くか？一番いいところやるよ」と。でも、悩んだんです。

その日は授業やグループ発表の話し合いがあったし、怖いのもありました。宮崎さんは、怖がりなのを知らないで、ほいほいどこでも行く子だと思って誘ったんだと思うけど、どうしようどうしようと返事出すのも時間がかかったんです。

中越地震のときは、2年後に行ったので、落ち着いて来た頃だったんですが、「直後は違うよ」という言葉を聞いて行こうと思いました。授業は1限だけ出て、残りの授業は「プリントをもらっておいて」と頼んで、話し合いも、出られないと連絡して。でも、友達は「いいよいいよ行っておいで」と言ってくれました。

現地へ行っても、「ただ見てくる」だけしかできないんですよね。軍手、レインコートなど作業できるように用意だけはして行ったんですけど、実際、見てくるだけでした。

はじめは、どこを見てたらいいかわからなかったんです。傾いた民家、山肌などを見て「あれ地震のせいかな？」と宮崎さんが指を差して。でも見てるだけだと、現実味がないんです。

家の片付けをしている横で、湧き水でナスを洗っているおばあちゃんに会ったんですよ。「な、なんだ！この光景は！」と余計わけがわかんなくなっちゃいました。その人の暮らしがあるんだから、当然といえば当然だけど。いかにも「地震の被害を受けました」

という感じの家の隣で、おばあちゃんがナスを洗っているというのは、ショックでしたね。

「生きてるんだな、生活してるんだな」というのを見ちゃうじゃないですか。実感が湧いたような、逆に遠くなったような。うまく言えないですね。ナスのおばあちゃんは、すごく覚えてるんですよ。

柏崎の西山へまち歩きのお手伝いで行ったことがあったんです。だから、なんとなく愛着じゃないですけど、准地元っていう感じなんです。そこに、まち歩きに参加していた人がいたんです。避難しているということは、被災者ということですよ。被災者というのは、中越地震のときは仮設にいる人というイメージがありました。そっちが先だったんです。知っている人が避難所にいるということ、被災者になってしまったということが、一番の実感でした。

地震の翌日なのに炊き出しが来ていました。寺島さんが、若栃の人と一緒に来ていて、豚汁を作っていました。若栃の人も知っている人ばかりなので、被災地だということを忘れて、はしゃいでしまいました。「〇〇さんがいる！！」という感じで。その状況を見て、手伝いたいなあと思っていたら、「お手伝いして行っていいよ」と宮崎さんが言ってくださったので、豚汁を作って配る手伝いをしました。配っていたら、前に来たときによくしてくれたおばさんにも会いました。おにぎりを分けてもらったり、お漬け物を持って来てくださって、余ったものを持たせてくださったりしたんです。こんな形で再会するとは思ってなかったんですけど。

■ボランティアを通して何か気付いた事はありますか？

全部はじめてのことでしたから、全部気付いたことでした。特別、気付いたことはと言われると困りますね。

ボランティアとは関係ないですが、不思議なことに乳牛が被災地に運ばれていたんですが、何なんだろうと気になっています。帰りの高速道路で、自衛隊とかが被災地に向かう車の中に、乳牛を積んでいる車があったんです。びっくりしました。

■今回の活動を振り返ってどのように思いますか？

後悔があるわけではないんですけど。潰れた家や困った人を見て「なんとかしなきゃ」と思うのが普通の気持ちでしょうけど、結局、私の場合、そのときの報告をするだけでした。「休め」と言われてしまったので、それっきりでした。ショックは、すごくあったと思うんですけど、でも、動かなかった。「おい、自分！」というか、とてもダメな先遣隊だなと思いますね。

見た人が、「やべー、動こうよ！」というのと、見たのを聞いて、「やべー、動かなきゃ」と言うのは、違うじゃないですか。もう少し、私にできることはいっぱいあったんだろうなという気持ちですね。

■今後の活動予定は？

今は主立って活躍はしません、隠居します。なんだろうなあ……。多分、すぐはみんな動ける、関心もあると思うけど、その分冷めるのも早くて。でも、中越のだいぶ後々まで大

変そうだなというのを見ていたし、すぐには私は動かなかったというのがあるので、たぶん、忘れられたところに、忘れられそうなところにですかね。もっかい、被災地に戻るのかなあと思うんです。

予定というほどのものではなく、予感ですかね。

■学生や大学の皆さんにメッセージを

これを見ている人の中に、被災者の人もいるわけですよ。なんて言ったらいいかわかんないな。経験してない人に、忘れないでというのは言えるけど、経験した人に、忘れないでとは言えないですよ。忘れられないのは当事者だろうから、私は、「忘れないで」とは言えないかな。

§3

とりあえず現地に行く

現地に行かずして、現地状況を把握・判断することは出来ません。とりあえず現地に行く、そしてニーズを丁寧に拾う。これがボランティアコーディネートの第一歩なのです。

福野 陽平

Yo-hei Fukuno

工学部 化学システム工学科 1年

災害復興の第一線で活動しているスタッフの一人。表はおおらかな感じに見えるが、実は色々考えている？！

■地震が起きたとき、何をしていましたか

その時は家の台所にいましたね。すぐにただごとではない揺れだと気づき、台所で冷蔵庫の上ののっている電子レンジや食器類が床に落ちないように、必死で支えていました。とりあえずあの揺れで立っていることが可能だったことに、自分でも驚いています。

■まず何をしようと思いましたか

まずは貴重品・携帯電話を身につけました。それと同時にテレビをつけました。自分の部屋から近くのアパートが何軒か見えるので、誰か避難している人がいないかと注意していました。もし逃げている人が一人でもいたら自分も間違いなく逃げていましたね。でも実際は意外と落ち着いて情報収集をしていた気がします。とりあえず避難しなきゃいけないことはわかっていたんですけど、勝手に『きっと大丈夫だろう』と考えてしまい、避難しなかったことが今思うと恐ろしいです。

■現地ではどのような活動をされましたか

現地ではピカピカ隊として活動していました。ピカピカ隊っていうのは主に子どもたちの相手をするボランティアです。子どもが危険なことをしたり、脱水症状にならないように監視することに特に気をつけて子どもの相手をしていました。他にも避難所の掃除や配給のお手伝い、おじいちゃんおばあちゃんの話し相手などもしました。イベントとかあった日はそれを手伝ったり、その内容を避難所中に宣伝したり、子どもたちをそこまで引率したりもしましたね。

■大学内ではどのような活動をされましたか

大学内ではポスター等の作成・掲示とボランティア受付がメインでした。初めの頃は、受付が慣れてない上に、不安いっぱいだったため、もしかしたら受付された人も不安になったんじゃないかと反省しています。他にもライフライン等の情報収集やその情報発信、『がんばってます！新大』のインタビューもしました。道路・路線の復旧情報は被災地まで個人的に行く人のため、こまめに現地までの地図を作り変えたりしました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

ありすぎて詳しくはここでは書けないくらいです。まとめてみますと

- 1, 暴力的な子どもとその対応
 - 2, 『子どもと遊ぶボランティア』の想像と現実のギャップで傷ついた学生ボランティア
 - 3, 与えられて当たり前という子どもたち
 - 4, 避難所内での大人と子どもの対立
 - 5, 怖い夢や寝不足などの被災者の傷
 - 6, 暑さや体力的な問題
 - 7, 周りの家の人すべて仮設に入ってしまう、孤立してしまった老夫妻
 - 8, 被災者のボランティアに対しての粗悪な扱い方
 - 9, 偽善としてのボランティア
- など沢山出てきます。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか

スタッフの情報共有のありがたいです。特に地震から数週間は情報やマニュアルがコロコロ変わったために、ついていくのに苦労し

たスタッフがたくさんいたことです。またテスト前のせいでもあります。カウンターに駐在できるスタッフと時間にもものすごくムラがあったことがきになりました。地震の前週に行っていた『災害シミュレーション』がものすごく役に立ったのと、7月17日には学内に情報を発信できていたことには自分でも驚いています。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

いろいろなボランティアさんに会えてよかったですね。自分の場合は災害復興というよりは、いろんなボランティアをしている人々と会うためってのが強かったです。ただ被災者の傷やストレスを発散するためには、その自分自分が傷ついたりストレスを受けなければいけなかったのがしんどかったです。

■これからどういった活動をしていこうと考えていますか？

11月に刈羽村で落ち葉拾いと焼き芋を作るイベントを考えています。前はビンゴ大会をしたのですが、なかなか人が集まりませんでした。今回はそうならないようにがんばります。これから寒くなってくると外で活動できることも限られてくるので、何かいいアイデアがないか考え中です。それから先になりますが来年の7月16日は学内で何かしたいと思っています。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

困った人がいたら話を聞いてあげてください。手を差し出してあげてください。それが善意でも偽善でもどちらでも構いません。人に優しくしてください。周りに優しくしてください。見て見ぬふりはしないでください。きっと優しくしてもらった人はハッピーになれますから。きっとその人も優しくなれるから。

善意でも偽善でも構いません。

人に優しくしてください。

見て見ぬふりはしないでください。

！注意！

正規版には、ボランチ。スタッフの新聞報道
記事が掲載されています。正規版にてご覧下
さい。

藤本 隆太

Rryu-ta Fujimoto

大学院 自然科学研究科 人間支援科学専攻 2年

ボランティア。の前身、震災ボランティア本部の立ち上げメンバーの一人。豊富な経験と論理的な持論を展開する兄貴的存在。

■地震が起きたとき、何をしていましたか

地震が起きる直前まで寝てました。でも、2,3秒前に「あ！来る！！」と思いました。地震予知みたいな感覚でした。

僕にとってこのような大きな地震に出会うのは3回目（阪神淡路大震災、中越地震、中越沖地震）なので、もう慣れてるんです。最初は「震度4くらいかな？」と思ってました。

■まず何をしようと思いましたか

すぐ横に窓があったので身を守るために布団にもぐりこみました。これは、地震予知した時点で考えつきました。そしてその後仲の良い人に安否の連絡をしました。しかも揺れてる最中に！中越地震の時にはすぐ電話できなくなってしまったんでね。「みんなが電話し始める前に！」って感じで、今回は早めに電話しました。

■現地ではどのような活動をされましたか

最初にやったのはピカピカ隊ですね。第2体育館に2回行きました。もともと子どもと触れ合うのは好きなので、とても楽しかったです！地震の話をするタイミングだけには気を遣って活動しました。それと、子どもたちとできるだけ接触面積を増やすことも心がけました。やっぱり人と人の距離があると仲良くなりにくいし、大人の中にいると安心するみたいなんですよ。距離があると話しもしてくれないんでね。そこは特に気をつけました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

子どもが生意気、そして攻撃的でした！あれは、もともとですかね（笑）でも、その他には特にありません。やっぱり3回目で慣れてるからですかね。

あ、中越地震の時にいたボランティアさんがたくさんいました。前回は楽しかったから今回も来てるのかな、と思いました。

■前回の新潟県中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

変わりました。中越地震の時はゼロから何かをつくる、という活動でしたが、今回はもともとあるものをどれだけ完成させることができるか、という活動だったと思います。今回の中越沖地震に関してはボランち。としての経験がしっかり生きていたのではないかと思います。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

中越地震の時よりも、自分に余裕があったように感じました。今回は人を見ながら自分の行動がとれました。これも慣れからくるものかもしれませんね。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

修論を早く書き上げたいです（笑）。もちろんボランち。にも来ますよ。この2つがあるから毎日楽しいんです。どっちか片方だけじゃ飽きちゃうしね！

それと、ボランち。には「継続」というより「毎回発足」という感覚で活動してもらいたいと思います。過去に頼るよりも自分たちで作りあげていくことで、より価値のあるものになると思うんですよ！過去は困ったときに頼るくらいで良いんじゃないですかね。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

学内でゴミを見かけたら拾おう！
きっとここから何かが見えてくると思います。

過去に頼るよりも自分たちで作
りあげていくことで、より価値のあ
るものになると思うんですよ！

小林 拓実

Takumi Kobayashi

工学部 機能材料工学科 3年

ボランティア活動に熱いハートを持つ。多くの学生が刈羽村でボランティア活動をする中、西山地区での活動を行った。

やると決めたらとことんやる性格の持ち主。

■地震が起きた日、どのように過ごされましたか？

「朝6時からボランチ。の活動で海岸清掃をした後メンバーとお昼御飯を食べる約束をして、一度授業のレポートを書きに帰宅しました。そのレポートを書こうとしたのが10時ぐらいで、その時に「ぐらっ」ときました。そのあとは携帯電話は使えずインターネット上の災害用掲示板や手持ちのラジオで情報を集めました。地震の起こる以前の災害シミュレーションや新潟市社協によるボランティア講座での経験が生きたためか、『起きてしまったから仕方ない。今何ができる？』という素直に現実を受け止められるような感情があって、今できる最善の手を尽くそうという気持ちになりました

■自分でボランティアをされてどんなことを感じましたか？

「ボランティア活動の間はまさに無力感との闘いでした。達成感を感じる人もいるのだと思うのですが、自分はまだ何かできることはあるんじゃないかと考えていました。たとえば、今回の地震で刈羽と西山周辺で唯一のスーパーが潰れるらしいという話を聞きました。この地域の方々は買い物できません。でも気がついて自分でもどうしたらいいのか分かりません。学生の力では無理があります。また、西山のボランティアセンターにおいては、マスコミによる地震の報道が柏崎や刈羽に偏っていたためか、集まる一般ボランティアが少ないためにニーズ調査も一般の活動もうまくできていませんでした。さらに大学が刈羽村に学生ボランティアの派遣を決定したことで、学生が西山へボランティア活動に行きにくいということも大きかったです。そんな西山をなんとかしたい。でも一学生に

できることはほんのわずかなことです。[達成感よりも無力感→実現できない→へこむ→でもできることがある！]というサイクルの繰り返しでした。

今回の復旧支援活動では様々な貴重な経験をしました。でもそれは被災者の方々がいたからであり、それを考えるといたたまれない気持ちになりました。西山での活動を終える時、とても素直な気持ちで頭が下がったのを覚えています。その時の気持ちはとても言葉では良い表すことができないのですが、単に『ありがとう』ではなく、『お世話になりました』といった思いでした

■大学内ではどのような活動をされましたか？

「自分は大学内での後方支援組よりも現地で活動する現地組よりの人間でした。それは学生がボランティアとしてできることを見極めたいということと、いざボランティアに行ってみてニーズが無い、ということ避けたいと考えたからです。後方支援と現地組と双方にとって動きやすくすることも考えつつ活動しました。そのために活動後の活動報告は毎日やりました。活動で夜遅くなってもボランち。でスタッフが待っていてくれたのは本当に嬉しく、心の支えでした

■これからどんな活動をしていこうと考えていますか？

「西山でのボラセンの現状を伝えることで、前に言ったマスコミの偏った報道などで地域が孤立するのを防ぎたいです。僕にとっては『西山を忘れない』ですね。無理ができるのは学生のうちだけなのだから頭の中で考えるのも大事だが、体当たりが本当に大事だ

と思います」

ボランティア活動の間は
まさに無力感との闘いでした。

松本 健一

Kenichi Matsumoto

工学部 化学システム工学科 3年

ピカピカ隊を率いる。被災地へ多数、足を運んだ。子どもたちの前では、普段とは違う熱い性格を見せる。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

地震が起きたときはアパートにいて、部屋の掃除の最中でした。最初揺れたときはアパートの横に線路が通っているので、また電車が通ったのかとしか思いませんでした。だが、揺れが続くにつれ、新潟にまた地震が起きてしまったんだと感じましたね。揺れがおさまったら実家に連絡を取りました。その後はテレビやラジオ、インターネットを使って情報を集めて、ボラんち。の災害用ブログに書き込んでいました。

■まず何をしようと思いましたか？

頭の中では倒れそうなものを押さえることとか窓を開けること、外に避難することが思い浮かんだんですが、実際には何もできずただ茫然としていました。揺れがおさまった後は、親や友人に連絡をとりました。

■現地ではどのような活動をされましたか？

ピカピカ隊として高町の避難所や仮設住宅にいて、子どもたちと一緒に遊んでいました。鬼ごっこやボール遊び、バドミントン、芝滑り、水遊びなどを良くやっていました。子どもたちはみんな元気で、こっちが止めないと夏場の暑い時期なのにずっと外で走り回り、遊んでました。その日の活動が終わり、帰る時間が来ると「次はいつ来れるの？」と聞いてくる子がいてくれ、うれしくなりました。その他の活動は家屋の掃除、片付け、荷物の運搬や被災した家から仮設住宅への引っ越しの手伝いをしました。

■大学内ではどのような活動をされましたか？

現地までの道のりやライフラインなどの情報収集と学生に対してのその発信をしていました。また、現地に行きたいという学生のコーディネートをしていました。コーディネートではなるべく現地の情報を伝えるようにし、参加する人が少しでも活動しやすくなるようにと考えていました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

避難所には救援物資が山積みになっており、明らかにその避難所だけでは食べきれない量の物資がありました。その中にはお菓子やジュースもあり、避難所にいた子どもたちはそれをよく食べていたため食事を抜くこともあり、心配になりました。また、食べ散らかしたままにしておくことが多く、そのことを注意すると、無視したり、反抗されたりと手を焼きました。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

中越沖地震でボランティアに参加してくれた人は約 550 人と多くの方が参加してくれました。だが、大学にはあんなに人がいるのにと考えてしまい、大学内の一部の人に限定してしまっていることが気になりましたね。現地では県外からボランティアに参加している人も多くいたので、どうしたらもっと多くの人に興味、関心を持ってもらえると思っていました。

■前回の新潟県中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

中越地震の際はまだ新潟に住んでおらず地震のことは後でテレビで知りました。当時は災害に対する意識がそこまで高くなかったため、家に置いてある非常持ち出し袋を確認するくらいでしたね。ボランティアに対しては何かやりたいとは思いましたが、実際に行動に移すことはできず何もしてませんでした。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

ボランティアって「大変そうだな」「資格がないと無理なんじゃないのかな」といイメージを持っている人が多くいると思うが、別に何か特別なものが必要というわけじゃないんだと思います。確かに資格があれば自分でやれることの幅は広がりますが、一緒に遊んだり、話し相手になるなど誰でもできること、そんな些細なことが必要なんじゃないのかなと思いました。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

ピカピカ隊の活動を月に 1,2 回のペースで続けていきたいと考えてます。ビンゴ大会や焼き芋大会などのイベントをやって子どもたちと一緒に楽しみたいなと思います。まあ、刈羽に通っているうちにあの場所が好きになったので、あそこでみんなと何かをやりたいただけなんです。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

ボランティアってなにも特別なことではないと思う。じぶんではやりたいからそこに行っていただけだし。誰かのために役に立つんだぞとかは全然考えないでいいと思います。

ボランティアってなにも特別なことではないと思う。じぶんではやりたいからそこ
にいっただけ。

コラム①

『ふれふれ隊』

ふれふれ隊とは、被災地の子どもたちと一緒に勉強したり話をする
ことにより、彼らの持つ不安や悩みを解消しようというプロジェクトであ
る。このプロジェクトは、新潟大学学生ボランティア本部と NPO 法人
「虹のおと」（代表 西田卓司）の協働で 9 月から行なっている。現在
は、生涯学習センター「ラピカ」と源土運動場内談話室の 2 ヶ所で毎週
土曜日 10:00～15:00 に行なっている。ボランち。では、このプロジェ
クトを 3 月末日まで継続して行っていく。学生ボランティア登録数も
着々と増え、今後も増加することが予想される。しかし、PR 不足が響
きあまり中高生が来ていない状態である。この解決策としては刈羽中学
校に直接赴き、ポスター掲示などを行った。

また今後は、活動登録者とのミーティングや毎回活動参加者より
提出していただいている「ふれふれ隊活動報告書」などを通じて、
積極的に現地の状況把握を行い、対象者の心の支えとなり得る様
なより良い活動を目指す。

森田 薫夫

Shigeo Morita

経済学部 経済学科 1年

どんな仕事でも冷静にこなし、先輩にも一目おかれる存在。現在はふれふれ隊などの様々なプロジェクトを持っている。

ボランティアってお互い様ですよ。
誰がいつ被災するかわかりませんから。

■地震が起きた日はどのようにすごしましたか？

自分のアパートにいました。生まれて初めての激しい揺れだったのでびっくりしました。揺れがおさまってもなかなか落ち着けませんでした。

一人で不安で誰かに会いたかったので、アパートの大家さんの所に、財布、携帯電話、充電器、キャッシュカード、近くにあった食料等をリュックにつめて持っていきました。大家さんと一緒にニュースの地震速報を見ていてやっと実感がわきました。

■現地ではどのような活動をされましたか？

お盆明けに実家から新潟に戻ってきました。学務の全体メールでボランティアのことを知りボランティアに参加しようと思いました。想像していた重労働とは違い、ピカピカ隊で活動しました。気がついたら荷物ではなく被災地の子どもを肩車して運んでいました。(笑)

■大学内ではどのような活動をされましたか？

学内で本格的に活動が始まったのは、9月に入ってからです。刈羽村での学習支援の担当になってからですね。具体的にはポスター作り、刈羽までの交通手段、9月から10月での変更事項の告知等をしたり、学習支援に参加する学生への参加確認メールを送ったりしています。参加学生のシフト表も作りました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

10月13日にふれふれ隊の活動をラピカで行った時のことなのですが、告知不足とテスト期間で刈羽の中高生があまり来ませんでした。告知の方法として、ラピカの館内放送を使ったり、刈羽中以外の学校や、ラピカに学習支援のポスターを貼ったりしたらどうかというアイデアが浮かびました。このときに感じたことなのですが、学習支援は中高生の心のケアを目的とした支援活動でありながら、告知方法などで多少強引な所があり、本来の目的から逸脱しているのではないかと考える事がありました。刈羽村の学生を無理やり、学習支援に参加させるのは自分勝手すぎるのではないかと感じました。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

学内での活動の合間に現地に行った時、ひさびさに行った感じがしました。実際に活動すると、思った以上に活動時間が短く感じ、思い描いたことと現実との違いを感じました。学内での支援は大切ですけど、スタッフも実際に現地を知る必要があるように思います。現地でもいざというときに頼れる人がいたらいいですね。

■前回の中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

中越地震のときは東京の実家にいました。テレビで被災地の様子を見て、これは大変だとは思いましたが、実際に行ったのは募金箱にコインを入れるだけでした。そのときは、被災地は大変だけれど、遠い世界の話のような気がしていました。

中越沖地震のときは、大家さんの実家が礼拝にあり、全壊してしまったという話を聞き、とても他人事とは思えませんでした。その気持ちでボランティア活動に参加しようという一番大きなきっかけになりました。

■自分でボランティアをされて、どのようなことを感じましたか？

ピカピカ隊の活動をしていたときのことで、たまたま保育士の方と一緒に活動することがありました。その中で子どもと相手をするときに、会話がしっかり成立する時は子どもとしてではなく、一人の人として接するように心がけるほうがいいなと思いました。

現地で活動していたときは、依頼されたニーズに応えるので精一杯で、被災地に本当に必要とされているものが分かりませんでした。最近になってももしかしたらピカピカ隊より一般のボランティア（家屋の片付け等）の方が足りていなかったのかなと思います。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

ふれふれ隊（学習支援）は責任を持って最後までやりたいと思います。新たな問題もこれから出てくるでしょうから、きちんとその都度対応したいですね。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

ボランティアってお互い様ですよ。誰がいつ被災するか分かりませんから。無理せず焦らずじっくり活動すればよいと思います。

天野 聡士

Satoshi Amano

工学部 化学システム工学科 3年

ボランチ。のカウンターをしきるカウンターマネージャー。大学とボランチ。のパイプ役を務める。大学内でも彼の顔を知る人は多い。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

寝ていましたね。地震で起きました。起きてすぐは何も考えられませんでした。でも、まずはテレビをつけました。情報が無いというのは怖いです。テレビをつけてしばらくした頃だったかな、日本列島の津波情報の絵が出ていました。揺れがおさまって、実家に電話しました。それからボランチ。のメンバー用の電子掲示板と災害時のスタッフ用のブログに書き込みをしましたね。

ちょうど1週間前に災害の講座を受けていたのであまり慌てませんでした。受けていなかったらと思うと怖いです。

それから、その日、地震が起きる前に海岸清掃をしていたので、時間がずれていたらと思うととても怖いですよね。

■まず何をしようと思いましたか？

身の安全は分かったので、家族に電話をし、テレビなどで震度の情報を得ました。それから、メンバー用の電子掲示板等へ書き込みをしました。この書き込みは、高田君が早くてびっくりでした。それから、メーリングが流れて学校にパソコンをもって集合しました。ボランチ。用のパソコンだけでは足りないと思ったので。学校についてからは、支援課へ学生への一斉メールの手配とバスのお願ひに行きました。でも、早く行き過ぎたようでしたけど。

■現地ではどのような活動をされましたか？

8月のテストが終わってからボランティアへ行きました。ピカピカ隊として活動しました。学科の友人と、ボランち。スタッフと一緒に行きましたね。赤田の避難所と学童保育でした。赤田では、子どもたちと野球をしました。4、5人の男の子でしたね。女の子は、女性のボランティアさんと遊んでいました。学童保育では、なわとびとか鬼ごっこなどをしました。そこで子どもの1人が「地震来るよ！だって地震雲出てるもん！」と言ったんです。これは、一生忘れられませんね。「怖い」みたいでした。

両日、午前中はふれふれ隊のミーティングでした。また、ボランティアセンターの運営もしていました。

■大学内ではどのような活動をされましたか？

後方支援をしてました。あまり仕事はしてないんですが、現地スタッフに天気や気温などの情報をメールしました。安全が大切なので、体調を崩さないように気をつけていました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

一番は、子どもが生意気だということですね。もともと生意気なのか、地震で不安になったためなのかは分かりませんが。一度、「手洗い、うがいをしなさい」と言ったんですが、「やだ！お願いするなら土下座だろ！」と言われたり、それを断ると、「それが嫌なら5万円」とか言われました。これにはすごくびっくりしました。避難所に、お年寄り子どもたちが一緒にいるというのは、お互いスト

レスなんだろうなと気になりましたね。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

ボランティアへ行った人の数が多いことですね。延べで540人強ですからね。カウンターにいと、次々に人が来るのでうれしかったです。来てくれる人も1年生から4年生まで幅広くなんです。「ボランティアなんて・・・」と思っていましたが、「こんなに来てくれるんだ！」と思いました。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

もともとは、あまりボランティアに興味が無かったのですが、「何かしたい」とむずむずしていてもたってもいられなくなったんです。「何かしてあげたい」ではなく、「何かしたい」んですよね。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

ふれふれ隊のプロジェクトリーダーをしているので、3月までそれをします。PR不足で、参加者も少ないので来る人を増やしたいと思います。それで、中高生が笑顔になるようになればと思っています。「ありがとう」の言葉がすごくうれしいです。前に、「ありがとうございました、来週もまた来る？」と言われたときに、自分が求められていることが分かって、すごくうれしかったです。

震災だけではなく、他のボランティアも扱っているサークルだから、地震の活動を生かしているいろんなところにも手を出したいです

ね。でも、ボランティア。のキャパシティーを見ながらですけど。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

「ボランティア」ってなんだろう？一人ひとりが違うことを言うだろうし、答えは無いと思う。でも、「高尚なもの」とは思わないでほしい。

「ボランティアって何だろう？」と問いかけたいですね。僕にも分かりませんが。

「何かしてあげたい」ではなく

「何かしたい」んですよね。

「ありがとう」の言葉がすごくうれしいです。

コラム②

『ピカピカ隊』

松本 健一 (プロジェクトマネージャー)

福野 陽平 (プロジェクトマネージャー)

ピカピカ隊とは…NPO (虹のおと) の西田卓司さんが発案したチーム。新大学生の大半はこれに参加して子どもの遊び相手や避難所の美化を努めました。

【避難所】

午前中は子どもたちが学校へ行っているため、避難所の掃除や被災者の方の話し相手になりました。避難所の掃除は、使用頻度の高いトイレの掃除をこまめにしました。お昼は配給されたお弁当の配布や配膳のお手伝いを行ないました。配給される食事は時間が経つほど利用者が減り、食べ残しの量が多くなりました。

午後は子どもが学校から帰ってくるため、子どもの遊び相手(危険の監視や脱水症状の防止)をしました。子どもの対応に慣れていない学生や、ボランティアの人数が少ない日は、肉体・精神的に苦しんでいる学生を多数見受けられました。帰りのバスでは大半の学生が疲れ果てて眠っていました。またイベントのある日にはその内容を避難所の方に伝えたり、開催場所まで子供たちの引率をしたり、イベントのお手伝いなどもしました。

[主なイベント]

かき氷作り、さかなクンやプロ野球チームが被災者を励ましにやってきたこと など

【仮設住宅】

子どもの学校がある平日は、談話室と集会所をおじいちゃんおばあちゃんに活用していただけるように、掃除・室内の装飾を行いました。来てくださった方にはお茶やお菓子をだして話し相手になりました。談話室や集会所の認知度が少ないためチラシを作成し各家に配布しました。また、朝夕2回ずつ仮設の花壇の水やりや、仮設応援パック(生活用品の詰め合わせ)の配布を行いました。

土曜日は子どもの遊び相手をしながら、平日の活動をこなしました。9月中のみ休憩棟という建物でピカピカ隊は子供たちと遊びました(談話室はふれふれ隊・集会所は年配の方が使用)。新潟大学学生ボランティア本部では子供向けのビンゴ大会を企画し、ピカピカ隊で実施しました。

仮設の近くにはアスレチックや芝生があり、子どもたちの遊び場になっていました。ビニールシートを坂道に敷き、シートの上に水を流して滑るウォーターライダーが子どもたちには大人気でしたが、着替えを持っていないボランティアも一緒にびしょ濡れになり、風邪をひきそうになった方もいました。小学校が始まってから、子供の数とピカピカ隊の数が合わなくなり、やる事がなくなって退屈をする学生も増えてしまいました。

[主なイベント]

流しそうめん、ビンゴ大会、クラウンk(世界的な道化師)が励ましに来たこと など

【学童保育ボランティア(にこにこ教室 in summer)】

○にこにこ教室 in summer

(8月1日(水)～8月7日(日)の平日)○

午前中は刈羽小学校にて子どもたちの勉強を教えたり話し相手などをしました。新潟大学学生から5人、1年生から3年生の計5クラスに各1人配属され、担任の先生の補助(個別指導・プリント類の丸つけ・レク等)を行いました。休み時間にはおしゃべりやトランプをして楽しみました。

午後は刈羽小の食堂(クーラー完備)にて、親の迎えを待っている子どもの相手(15~20人)をしました。子どもたちは食堂内ではしゃぎまわるか、ずっと携帯ゲームをしていました。この時期は30度を超える日が続いたので、外に出たがる子どもは少なく、室内で遊ぶことが多かったです。また子どもたちを外で遊ばせる時は、体調管理や危険防止に配慮しながら相手をしました。

○学童保育ボランティア

(にこにこ教室が終わった後から始業式まで)○

基本的にはにこにこ教室の午後の活動が1日中になったことです。ボランティアは基本的には5人配属されるが、お盆が過ぎてボランティアの数が減ったため、時には4人で活動しなくてはいけない日もありました。

！注意！

正規版には、ボランチ。スタッフの新聞報道
記事が掲載されています。正規版にてご覧下
さい。

山口 正晃

Masaaki Yamaguchi

理学部 数学科 1年

ボランち。と陸上部を兼部している頑張り屋。
カウンターで活動ができない分、IT関連で先輩を
サポートする。

被災地に行つて
「本当にこんなことがあるんだ」
と衝撃を受けましたね。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

起きた時間とほぼ同時ですね。揺れる直前くらいに起きていて、ベッドの上でひどい揺れを感じました。ベッドの上だから分かったのかも知れませんが、横揺れがひどかったですね。左右に揺られて、「あ、やばいな。潰れるかなあ。」と思いました。

特に恐怖感を覚えたということはないのですが、余震があると、「また大きく揺れるかな。」と思いましたし、自分の気付いていないところで恐怖感はあったのかも知れせんね。

■まず何をしようと思いましたが？

まず、ガスの元栓を締めましたね。「締めなくては」と思った訳ではなく、無意識のうちに締めに行っていました。その後は、何をすれば良いのかも分からなかったので、ギシギシ音を立てている家の中にいましたね。

少し落ち着いてからは、実家に連絡をしようと思いましたがね。ところが、携帯のメールが送れないんですよ。仕方ないので、パソコンのメールで、両親の携帯やパソコンなど思い当たるものには一通りメールを送りましたね。どれか一通くらいは見るだろう……と。

揺れが収まった後は、「ボラン家。」(スタッフ専用掲示板のこと)を見ましたね。スタッフの動きを確認して、招集がかかったら、パソコンを持って大学に向かいました。

■現地ではどのような活動をされましたか？

お盆前に一度刈羽村に行きました。お盆を過ぎると、仮設住宅ができますよね。その前に、地震直後の様子を知っておきたかったんですよ。

大学のバスで行って、ピカピカ隊として活動しました。現地に行ったメンバーと第2体育館のそうじをしたり、子どもと一緒にランプやバトミントン、で遊んだり、外を散歩したりしました。あと、子どもたちの勉強を見たりもしましたね。

■大学内ではどのような活動をされましたか？

大学内では、地震発生当日に、まず、地図を用意して情報収集をしました。

その後は、理学部掲示板の管理を中心に活動しました。地震の翌日は、朝一番に学生の目に地震の情報が入るように、朝8時前には掲示板の内容を新しくしましたね。それ以降も、新しい情報が出ると、すぐに貼り替えて、常に新しい情報を発信するようにしていました。

また、カウンターに居られる時は、学生ボランティアの受付もしました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

まずは、衛生面が気になりましたね。そうじをした時に紙タオルがなくて、困りました。物資には限りがあるとは思いますが、健康面や衛生面に関わるものは足りない時期があってはならないと思いましたね。

もう一つ、勉強を教える機会があったので、学習環境というのが気になりましたね。中3や高3の受験生の子がいて、適当な机を見つけて勉強を教えたのですが、「これじゃあ、勉強はできないな。」と思いました。夏場ということもあり、体育館の中が暑いんです。それに加えて、雰囲気がどんよりしているんです。避難所ですから、休んでいる方もいらっしゃいます。それに、外の状況はいつもと

違いますし、どこかへ行くという選択肢がなくて、やることがないんですね。避難所全体に、何となく疲れた雰囲気が漂っていた気がしますね。

ボランティアセンターに戻って、ミーティングの時に、自分の感じたことを伝えたら、ボランティアセンターのスタッフの方も学習環境が気になっていたようで、「ボランティア。」での企画を打診されました。大学に戻って、スタッフにそのことを伝えた記憶があります。「ふれふれ隊」はこの時から始まっていたのかも知れませんね。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

情報収集に関しては、現地の情報が遅いというのが少し気になりましたね。被災地の状況は刻一刻と変わります。それをもう少し早く伝えてもらえると良かったな……と。内容自体も欲しい情報がなかなか手に入らず、困ることがありましたね。

また、同じ学生の中でも関心の高さが違うということを感じましたね。

まず、掲示板に関しては、PoNPが減らないんです。もちろん、PoNPを読むことで関心の高さが示される訳ではないのですが、地震が起きたのになぜ減らないのだろうと……。掲示板に関しては、手応えを感じることができませんでしたね。

その一方で、カウンターで受付をしていると、関心の高い人が沢山いらっしゃるんですよ。受付をした中には、何度か活動されている方もいらっしゃいました。「また行きたい」と思って下さったことが嬉しかったですね。初めてボランティア活動をされるという方もいらっしゃいました。カウンターに来るだけでも緊張するのに、被災された方のために来て下さったんですよ。本当に嬉しいことだと思いましたね。

■前回の新潟県中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

前回の地震に関しては、新潟にいなかったこともあってか、全く知らなかったですし、関心もなかったですね。2回目だからこそ関心をひくとは思いますが、テレビで観るのと、自分で気にするのは違いますよね。「外」にいると関心もないのかなあ……と思いますね。

今回、「中」の立場になって、「外」の人にも関心を持って欲しいと思いましたね。ギャップは仕方ないとは思いますが、両方を経験したからこそ、「中」から「外」に向けて活動していくのも手だろうと思いましたね。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

まず、被災地に行って、「本当にこんなことがあるんだ」と衝撃を受けましたね。見渡す限りのものが壊れていて、見たことのない景色でしたからね。被災地を歩く機会があったのですが、細かいところも壊れているんです。

それから、ボランティアは必要なのだと感じましたね。ボランティアの中にも、自発的に来ている人や仕事で来ている人、色んな人がいました。同年代で東京から来て、数日間滞在している人もいて驚きましたね。中には、誰かに言われて来ている人もいました。でも、決して手を抜かないんです。

あと、ボランティアセンターの運営スタッフの方であったり、避難所を管理している県の職員の方であったり、被災された方の身近にいて声を聴ける人がいると言うのは大切なことだと感じましたね。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

兼部をしていることもあって、なかなかカウンターに来られないんです。だから、カウンターに来られなくてもできることをしようと思っています。具体的には、IT マネージャーとして、公式 HP や掲示板、スタッフ内メーリングリストの管理などをしていこうと思っています。HP については、自宅からの更新となりますが、情報が遅くならないように工夫しようと思っています。対外的な交渉などはありませんが、「ボランち。」の中の情報処理を担っていこうと思っています。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

中越沖地震があったこと、被災地の様子、地震とその周りで起こったこと全体を知っておいて欲しいですね。

！注意！

正規版には、ボランチ。スタッフの新聞報道
記事が掲載されています。正規版にてご覧下
さい。

柿沼 美波

Minami Kakinuma

人文学部 3 年

一見物静かな性格に見えるが、実は熱いハートの持ち主。今は主に地域関連の活動に力を注いでいる。

現地を見て、何かを感じてほしいと
思いですね。そして、今回の地震の
ことを忘れないでほしいです。

■地震が起きたときに何をしていましたか？

レポートを書いていました。地震発生時はあのような揺れ方は初めてだったのでやばいと思い、動揺してしまいました。

■まず何をしようと思いましたか？

最初の揺れがおさまった直後にテレビをつけたが、すぐに速報は出ていませんでした。これは不思議に思いましたね。それでも、津波警報が出ていたのでどうして良いかわらなくなりとりあえずドアを開けましたね。そして、外を見回してみましたが避難している人や騒いでいる人が余りいなかったので、親に連絡をとり、とりあえず部屋で待機しようということにしました。初めはつながりましたが、その後しばらくするとつながりにくくなりましたね。

■現地ではどのような活動をされましたか？

やはり、現地の様子が見たかったというのが一番ですね。ピカピカ隊に参加させてもらい、刈羽村に行ってきました。内容としては、子どもと遊ぶことをメインにして、そのほかにも避難所で生活している方とお話をしたり、掃除を行いました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

1 番はやはり、プライバシーが十分に確保されていないということですね。普通に生活はしているがどこかストレスやいづらさ・まだ地震をひきずっている感じがしました。活動をした日は猛暑日で、扇風機だけでは十分

に涼しくできない状態でした。お年寄りで体調を崩している方もいました。この環境で生活するのはつらそうだと思いますね。

また、仮設住宅を見に行きましたが、部屋の場所などは自分たちでは決められず、不満があると聞きました。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

スタッフが足りず、対応が大変でしたね。

■前回の新潟県中越地震のときと、対応の仕方は変わりましたか？

前回の地震のときは新潟にいませんでした。揺れもたいしたことがなかったので、何もありませんでしたね。今回の地震で危機管理の大切さを感じ、災害時の対策をしておき、また必要な知識を身につけようと思いました。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

現地の様子を見ることができてよかったですね。色々な地域の方々が協力して作業を行っていたので、人々の心を感じ、いい刺激を受けました。また色々な話のできたのでいい経験ができましたね。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

今回の経験を生かしたいと思います。中越地震・中越沖地震の被害や状況などの現地の声を風化させないように、今度に伝えていく必要があるでしょうね。また、定期的に現地に行き復興状況を確認し、自分たちでも伝えていきたいと思います。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

縁があつて新潟にいるので、ボランティアに参加してほしいと思います。現地を見て、何かを感じてほしいですね。そして、今回の地震のことを忘れないでほしいです。

高田 康宏

Yasuhiro Takada

工学部 化学システム工学科 3年

北海道の広大な大地で育った彼。そのせいなのか、おとなしい。そんな彼も、自分のことより後輩のことを第1に考えているしっかり者。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

家で掃除をしていました。いきなり地震が来て、最初は小さかった揺れがだんだんと大きくなっていくのは、怖かったです。そのあと、テレビをつけました。地震関連のニュースがやっていて、それを見てやっと「ああ、地震が起こったんだな、」という実感が湧きました。

■まず何をしようと思いましたが？

地震が起こったあと、カウンターで地震情報や、交通情報などの準備をしていました。個人的には一般の学生が、ボランティアをしたいといつカウンターに来ても、万全の対応が出来るように、できるだけ情報収集をしておこうと思いました。

■現地ではどのような活動をされましたか？

子供たちと一緒に遊ぶ、といった活動が多かったですね。肉体的には思ったよりきつかったです。子供たちと遊んでいると童心に帰れて楽しかったし、みんな喜んでくれたので、それはとても嬉しかったです。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

子供相手なので、中にはいけないことをする子もいたんですが、なかなか叱れない、といったことがありました。子供たちの世話をする人も厳しく注意するのですが、なかなか子供たちが聞かない、ということもありましたね。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

ボランティアって、楽なものって少ないと思うんです。むしろ結構骨が折れる。それでも、「このボランティアが必要だ」「自分が必要とされている」と思うと、不思議とやる気が湧いてくる。だから無償でも活動できると思います。ここがアルバイトとの決定的な違いだと思います。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

まだまだ地震の心の傷が癒えていない人もいます。そんな人たちの心の癒しに一部分でもいいから、自分になれるような活動をしていきたいなと思います。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

被災は、思った以上に立ち直るのに時間を要します。起こった直後だけが矢鱈にクローズアップされますが、これからもボランティアが必要な場面が多々あります。震災直後の大掛かりなボランティアだけではなく、これからの心のケアのようなボランティアがむしろ大事なのかなと思います。

「このボランティアが必要だ」
「自分が必要とされている」と思うと、
不思議とやる気が湧いてくる。

近藤 彩野

Ayano Kondo

法学部 法学科 2年

今回の中越沖地震では出身地が被災。柏崎市民として現地でのボランティア活動を積極的に行った。

自分のできる活動があれば 積極的に参加していききたい

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

一人でアパートにいて、インターネットをしていました。地震が起きた後はすぐにボランティアの BBS に書き込みをしました。中越地震のときよりも揺れが大きいように感じたので、とても怖かったです。その他は、家族などと連絡をとり、無事を確認していました。

■まず何をしようと思いましたか？

まず、アパートにいと危ないと思ったので、一回外にでました。知り合いをみつけようとしたのですが、見つけられなかったので、アパートに戻りました。余震が来ると思ったので、非常食（お米1合、非常食の餅、水）を持って、図書館に避難しました。意外と図書館の中は、平然としていました。本も全然落ちていませんでした。通常の図書館とあまり変わりなく新大生は落ち着いていて、逆にすごいと思いました。

■現地ではどのような活動をされましたか？

ボランティアセンターを活用してもらうための PR のチラシ配りをしました。チラシ配りをしながら、地域の人のお話を聞いて情報の共有や心のケア、困っている人へのアドバイスをするなどをしました。崩れた壁などごみとなるようなものも、保険の関係ですぐには捨てられないということもあり、ごみを捨てたいのに捨てられない人が多くて、現実的な作業が滞っている場面も多々見られました。実際に現地を見ることでしか分からない状況を見せられた気がしました。他にはごみの分別（危険物を分ける作業）やお寺の掃除をやりました。ごみを出すために土の中から

危険物を分別したり、木の枝等を小さくまとめるという作業をしました。土は、思っていたよりも重くて移動させるのが大変でした。とても地道な作業だったので、自分たちの班だけでは終わらないほどでした。一番大変なのは、やっぱり、現地の所有者で指示を出している人です。ボランティアの人達に（おそらく）一週間くらい同じ指示をだして、ずっとそばで見ているなければならないのだから・・・しかも、夏暑いときにずっと外にいないかなければならなかったのだから大変だったと思います。すごく悲しいはずなのに、ボランティアの人達を笑顔で受け入れてくれました。すごく強い人だと思いました。お寺ではほうきで掃いたり、雑巾で拭いたり、障子の張替えなどをしました。仏教についていろいろ教えてもらいました。

■大学内ではどのような活動をされましたか？

最新情報を集め、情報提供などをしていました。あとは、ボランティアコーディネーターなどです。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

[よかったこと]

新潟県外から多くの方がボランティアに参加してくれて、本当に柏崎市民としてうれしかったです。

[わかったこと]

ボランティアの人の中で、珍しそうに写真をとってる人をたくさん見かけました。相手の人の立場にたって、考えて行動してほしいと思いました。

■前回の新潟県中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

地震についての講座を受けていたので地震について考える時間が増えたりなど、地震について心の準備が出来ていたと思います。非常食も用意していたし、ラジオも持っていたので、中越地震の時と比べて、自分なりに対応が出来ていたと思います。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

実際、自分は、何も出来ないんだなあと感じました。そんなに体力もないから力仕事もろくに出来ず、軽トラックの運転も出来ないの、材料の持ち運びも出来ませんし。でも、みんなに助けられて、自分は今生きているんだなっていうことを感じました。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

柏崎市民なので、自分に出来る活動があれば積極的に参加していきたいし、できれば地域の復旧・復興に貢献していきたいと思います。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

これからも地震に対して常に敏感になってほしいです。準備する時間・考える時間がながければ、長いほど、被害が少なくてすむと思うので。

！注意！

正規版には、ボランチ。スタッフの新聞報道記事が掲載されています。正規版にてご覧下さい。

§4

後方支援の大切さ

現地に行くだけがボランティアではありません。多くの学生を新潟大学と被災地とを結ぶ為に、大学内では情報収集や、広報活動など様々な活動が実は必要なのです。

久保田 雄紀

Yu-ki Kubota

工学部 化学システム工学科 3年

ボランち。の IT をしきる IT マネージャ。コンピュータやホームページについては彼の右に出るものはいない。最近は、大学と地域をつなげることに熱を注いでいる。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

レポートをしていました。起きた瞬間はよくわからなかったですね。すぐに机の下に隠れることができませんでした。おさまってすぐに窓をあけて外の様子を伺いましたが、アパート周辺の大学生はみんな静かで、冷静なんだなと思いました。(笑)

■まず何をしようと思いましたが？

まず、テレビをつけました。友人たちへメールを送りました。そしてすぐにボランち。スタッフからメーリングが回ってきたので、パソコンを持って大学へ向かいました。

■現地ではどのような活動をされましたか？

仮設住宅をまわり、ニーズ調査と仮設住宅への引越しの手伝いを行いました。被災者の方々がとても優しかったことが印象的でした。地元の大学生ということで喜んでいただけました。

■大学内ではどのような活動をされましたか？

地震前から担当していた広報活動を主に行いました。インターネットを利用しスタッフが情報を共有できるようにインターネット上に専用のページをつくり、管理しました。

また広報活動のために中越沖地震用の HP の作成、ボランち。の広報誌である『PoNP』号外の編集・発行などを行いました。これらは学生や外部の方への情報提供を目的として行いました。インターネットと紙面の両方から学生へ向けてボランティアの募集を呼びかけ、ボランち。での活動報告を学内外へ

発信しました。

HP を立ち上げることが遅かったことが反省点ですね。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

ニーズ調査でも、なかなか困っていることを打ち明けてくれないということです。なかなかニーズもありませんでした。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

広報の難しさというものを実感しました。すぐに情報が変わってしまうので常に最新の情報を手に入れて、公表しなければならないことです。またより多くの学生に情報を知ってもらうにはどうしたらよいか、いろいろと創意工夫しなければならないと思いました。

現地で活動していたスタッフの安全面のことや体調も気になりました。スタッフの数が不足していて一人ひとりにとっても負担がかかっているように思いました。

■前回の新潟県中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

ボランち。にすることで、災害に対する危機感をより強く持つようになりましたね。災害講座にも出て勉強もしましたし。自分がボランティアをしたということが最大の変化だと思います。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

ボランち。はボランティアコーディネーター団体ですが、こういった団体の必要性を改めて感じました。ボランティアに参加される方のバックアップというものは絶対に必要だと思います。

また、いつ何が起きても素早く対処できるよう、日ごろから体制を整えておく必要があると思いますね。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

まずは後方支援の体制を確立させることです。今回の活動を反省し、今後役に立てていけたらと思います。

また、この近辺で災害が起きたらという事態に備えて、地域の方々と大学生が協力し助けあえるよう良好な関係を築きあげていきたいです。地域の人々が協力しあえば災害は最小限に食い止めることができると思います。災害後、すぐに助けにきてくれるのはボランティアじゃなくて地域の人々ですからね。そのために両者を結びつけるきっかけをつくりたいと考えています。そこで、新大に近接している内野町に焦点を当てて、町内でのボランティアニーズを調査し、ボランティアを通じて地域の方々と学生が交流できる場を提供するといった計画を思案中です。双方の交流によって町の人々における新大への信頼を高められたら、と思います。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

ボランチ。が発行している広報誌『PoNP』と掲示板のポスター、HP をぜひ見てください。結構苦勞して作っています（笑）。

ボランティアに参加される方の
バックアップというものは
絶対に必要だと思えます。

コラム③

『後方支援の必要性』

久保田 雄紀 (IT マネージャー)

■ 後方支援？ 必要？

『後方支援』という言葉をご存じでしょうか？ 聞き慣れない言葉だと思います。後方で支援をすること？ 漢字からなんとなく分かると思います。しかし、『後方支援』という言葉にはもっともっと深い意味があり、ボランち。にとって多くの課題があります。

今回のように、もし地震が起きてしまったら・・・その時に必要とされるボランティア活動はどういったものがあるのでしょうか？ もちろん現地でのボランティア活動が一番大切です。しかし、その一番大切なボランティアを派遣する為にお手伝いできることはないのでしょうか。 ボランティア活動をしたと思った時、まずどこへ行けばいいのでしょうか？ 被災地までの交通手段は？ 持ち物は？ けがをしてしまった時は？ など、多くの問題が浮かぶでしょう。

そんな問題点を解決し、ボランティアの派遣を円滑にさせる活動が『後方支援』です。

もし後方支援がなかったら・・・

ボランティア活動に参加する為に、多くのことを自分で調べなければなりません。これはとても大変な作業です。もしかしたら途中であきらめてしまうかもしれません。

しかし、後方支援を行う団体があったら「ボランティアならここへ行ってください。」や、「被災地までの交通手段は大学から無料のシャトルバスが出ます。」などといったアドバイスをすることができます。きっと多くの学生がボランティア活動をしやすくなるはずですよ。

さて、ボランち。ではなぜ『後方支援』を行うのでしょうか？ それはボランち。はボランティアコーディネイト組織だからです。『ボランティアコーディネイト』とは、ボランティアニーズとボランティア活動に参加したいという方々を結び、ボランティアをしたいという方の背中にそっと手を添えるようなことである、とボランち。では定義しています。今回の災害においてボランティアコーディネイトを行うにあたり、必要なものは以下の2点です。

- ① 現地の被害状況の確認、ニーズ調査
- ② ボランティアに参加する学生のバックアップ

後方支援は②にあたります。

被災者から見たら間接的であり、『縁の下の力持ち』という言葉が合うかもしれません。しかし、ボランティアに行きたいけれどどうしたら良いかわからない方にとっては、直接的なボランティア活動です。以上から後方支援とは立派なボランティア活動であると言えるのではないのでしょうか。

■後方支援の活動

後方支援の活動はたくさんあるため、すべてをご紹介することはできません。簡単に分類すると以下のようなものがあげられます。

- a. 大学側との連携、交渉、活動報告
- b. 情報収集
- c. 書類の作成
- d. 学生ボランティアの受付
- e. 現地で活動しているボランティアのバックアップ
- f. 広報活動
- g. カウンターの運営（電話対応等）
- h. 他のボランティアセンターとの連携
- i. スタッフ間の情報共有

これだけ？と思われた方もいらっしゃるかと思います。しかしこの活動一つひとつがとても大変なのです。

例えば情報収集の場合、被災地の情報は日々変わります。昨日の情報が今日は違う・・・といったことは頻繁に起こります。だから、毎日情報収集をする必要があるのです。そして、被災地の情報の変化に伴い、掲示物や広報誌などの変更、HPの更新も必要となります。どんなポスターを作ったら見てもらえるのか？ 考えていたら寝る暇がありません（笑）。

■後方支援の問題点と辛さ

後方支援をしている中で一番辛かったことはその必要性が認められないことです。外部からもボランち。スタッフからも認められていない、そんな気がしました。やはり、被災者へ直接お手伝いができない分、必要がないと思われてしまいがちです。でも、視線をち

よっとだけ変えて見て欲しいと思います。被災地でボランティア活動をしたくてもどうしたら良いか分からないという方へ目を向けてみてください。個人でボランティアに参加しようとしたら、きっと多くの学生が諦めてしまうはずです。ボランティアに参加したいけれどもどうしたら良いか分からないという悩みを解決できるのは後方支援です。

しかし、スタッフの間で後方支援に対する考え方に差があるためか、後方支援を行うスタッフは数人でした。時にはボランち。のカウンターに一人ということもありました。

人数不足のため、できたことよりもできなかったことの方が多かったと思います。最低限やらなければならないことをこなすことで精一杯でした。どうしたらボランティアの必要性が伝わるのか？ どうしたらボランち。でボランティアを受け付けていることを知ってもらえるだろうか？ もっともっと考えたいことはたくさんありました。

もちろん、スタッフへ後方支援の必要性をしっかりとアピールできなかった私自身の責任もあります。時にはスタミナ切れで現地で活動を行っているスタッフへのバックアップが疎かになってしまったこともありました。

満足できる活動ができていない後方支援では、その必要性を主張できないですし、頼られることもありません。ここが一番の問題点であり、反省点でもあります。

■問題解決のために

人数不足を解決するためには後方支援の重要性をアピールする必要があります。しかし、ボランティア。スタッフにもアピールができていない状況でスタッフ以外の学生にアピールをすることはまだまだ難しいことだと思います。2004年の中越地震を機に発足した『新大震災ボランティア本部』。この時は中越地震のボランティア活動のみを扱う（コーディネートする）団体でした。しかし、現在の『新大学生ボランティア本部』は災害ボランティアだけではなく、その他多くのボランティア活動を扱う（コーディネートする）団体となりました。被災地の復旧・復興という目標を掲げていた震災ボランティア本部時代から、一人ひとり様々な目的や目標を持つ学生ボランティア本部となった今、スタッフ間での考えの違いも解決しなければならない課題なのかもしれません。まずは後方支援としてどのような目的でどのような活動を行ったのか、しっかりとスタッフに伝えていきたいと思います。そして、多くの学生に『後方支援』の大切さを訴えかけることが必要です。

もし、次の災害が起きてしまったら・・・そんなことは考えたくはありませんが、絶対には言い切れません。実際に2004年の中越地震後、3年も経たないうちに中越沖地震が起きてしまいました・・・今回の反省点を生かし、もっと質の高い後方支援ができるよう普段から考えていく必要があります。

■最後に

『後方支援』を少しでも分かっていたかどうか？ 後方支援には多くの仕事があります。そんな特徴を持つ後方支援は、一人ひとりのスキルを生かしやすいボランティア活動です。一方で、人数が必要になるということでもあります。被災地には行けないけれどもボランティア活動をしたい、自分の好きなことをボランティア活動に生かしたいなど、どんな理由でも構いません。絵を描くことが得意だからボランティアを呼び掛けるためにポスターを書く。これも立派なボランティアです。ボランティアが好きである必要はありません。『ボランティア』を意識していなくても、結果として自分の好きなことをボランティアに生かすことができる、そんな活動が後方支援だと思います。もし、後方支援に共感していただいた方がいらっしゃいましたら、ボランティア。にお越し下さい。

最後になりますが、ボランティア登録をして下さった方や救援物資を提供して下さい下さった方、情報提供をして下さった方など、ご協力をして下さった方々へこの場をお借りしてお礼申し上げます。

小林 由李

Yuri Kobayashi

農学部 応用生物化学学科 2年

主にカウンターでの受付や掲示物での広報活動を行うカウンターマネージャ。彼女の笑顔を求めて、スタッフは今日もカウンターへ向かう、、、。

多くの人が関心を持ってくれた
ことがうれしかった。

■地震が起きた時、何をしていましたか？

地震が起きた時は新潟市内を車で走行中でした。車に乗っていたせいか地震の揺れには全く気が付きませんでした。車から降りてみると港の方からサイレンが聞こえてきましたが、たぶん訓練だろうと思っていました。建物の中に入るとエレベーターが止まっていて、「先程の地震の影響によりエレベーターは停止しています。」という館内放送が入りました。それを聞いて初めて大きな地震が起きたことに気が付きました。

■まず何をしようと思いましたか？

とりあえず地震の情報が知りたかったので車の中でラジオを聞きました。それで中越沖で震度6ということが分かり、本当に驚きました。親戚から電話がかかってきて、前の中越地震くらい揺れたと言っていたので、早く帰らなくてはいけないと思いました。心配だったので地元の友達や親戚の安否を確認しました。「ボランち。」にも連絡を入れようとしたのですが、携帯電話の回線が混み合っていて通じませんでした。三条の実家も心配だったので帰り道に公衆電話で連絡を取りました。(公衆電話は一回で通じました。)公衆電話には5人くらいの人が並んでいて順番が回ってくるまでに20分くらい待ちました。緊急時の公衆電話の重要性に気付きました。

自宅に帰ってからは親戚の家など近辺を回って被害状況を調べました。あまり大きな被害はありませんでしたが、物が落ちたり土壁が割れたりしていたので、その片付けをしました。

■現地ではどのような活動をされましたか？

8月21日に刈羽村の源土仮設でピカピカ隊として活動しました。そこで子どもたちと水遊びをしたり、おしゃべりをしました。次の日には流しそうめん大会があったので子どもたちや他の一般ボランティアの方々も一緒に準備をしました。また流しそうめん大会の告知のビラを仮設住宅に1軒ずつ回って配布しました。その時におばあさんが「暑いのにこんなところまでありがとう、倒れないように気をつけてね。」と言ってくださり、逆に気を使わせてしまって申し訳ないような気がしました。

■大学ではどのような活動をされましたか？

ボランティアの受付、情報収集、電話対応などをしました。始めは次々と情報が移り変わり、受付対応のやり方が変わることが多くありました。毎日情報を整理し、新しい情報をスタッフが共有できるように気を付けました。また「がんばってます！新大」のインタビュー記事やボランティア、スタッフ募集のポスター作りなどをしました。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

私はピカピカ隊という子どもたちと遊んだりおしゃべりするボランティア部隊として活動しましたが、子どもたちとの接し方が難しかったです。地震の直後の子どもたちは興奮状態で、大学生ボランティアをたたく、水をかける等の攻撃をしてくる子どもが多く見られました。慣れない仮設住宅で不安な毎日を過ごし、知らず知らずのうちにストレスが溜まっていたのかもしれません。なので

第三者がこうして間に入りストレスを発散させてあげるという意味では役に立てたと思います。

■大学内で活動されて、特に気になったことはなんですか？

今回の地震ではスタッフの対応がとても早かったことです。大学側もそれに早く答えてくれたと思います。そして一般学生もテスト期間中という忙しい時期にも関わらず、多くの人が関心を持ってくれたのがうれしかったです。夏休みに入ってカウンターに常駐できるスタッフが限定されてしまいかなり負担が集中してしまいました。ボランティアとして現地に行くスタッフだけでなく、後方支援のスタッフの人数も増えてほしいです。

■これからどのような活動を続けられますか？

今主体となっている「ふれふれ隊」の広報活動や新大祭での写真展などを通して地震を風化させないように広報活動を続けていこうと思います。また地震が起きた時のために、地域や学内とのつながりを大切にしていきたいです。

■大学生、学内の人達へのメッセージはありますか？

地震に限らず身の回りにも「このままでいいのだろうか、何ができるのだろうか。」と思うことがあるのではないのでしょうか。それはもしかしたらボランティアの力で変えられるかもしれません。「ボランち。」では「もっとこうの方がいい。」「〇〇がしたい。」というような企画や要望、お悩みなどを大募集中です。

泉 和恵

Kazue Izumi

法学部 法学科 2 年

今回の地震では後方支援の活動をする傍ら、他団体や地域の会議にも参加し、ボランティア。とのつながり作りに努めた。スタッフからは「スー」の愛称で呼ばれている。

私にもできる、
私でも力になれると
思いましたね。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

祝日だったので、家でレポートを書いていました。地震発生直後、レポートを書くために使っていたパソコンを閉じて財布と携帯電話を持って、避難経路を確保し、今にも落ちてきそうな電子レンジを、明日の食事のため懸命に押さえていました（笑）。地震が収まった後はテレビで地震速報を見て、ライフライン状況や親の安否確認などをし、1時に「ボランち。」へ向かいました。自分が「ボランち。」へついたときにすでにスタッフがそろっていたことにとっても感服しました。「ボランち。」では1日中刈羽のハザードマップを作成していました。

■まず何をしようと思いましたが？

まずは財布や携帯電話などの貴重品の確保と、避難経路の確保をしました（あと電子レンジ）。親への電話は通じず、結局メールで済ませました。またインターネットの「ボランち。」BBSなどで情報交換をし、その後はひたすら「ボランち。」でハザードマップを作成していました。

■現地ではどのような活動をされていましたか？

私は今までカウンター業務をしていましたが、8月19、20日に初めて被災地の学習支援センター「ラピカ」へ行きピカピカ隊としてボランティア活動をしました。

すでに復旧支援のボランティア活動は終わりのほうで子どもが少なく、ほぼ通常運営に近かったのですが、ラピカの体育館で食事配膳や子どもの遊び相手などをしました。そこで配られた食事はカレーライスやごはん、味噌汁などごく普通の食事であり、子どもでも

大人でも等分になるような食事でした。子どもはとてもやんちゃで可愛かったですね（笑）。

■大学内ではどのような活動をされていましたか？

大学内では掲示板の管理やカウンターでコーディネート、ボランティアへ行っている学生への後方支援などをしていました。具体的には被災地に行っている学生に天候や交通情報、励ましのメール、熱中症などの注意喚起、シャトルバスへの見送り、お出迎えなどです。

■現地で活動されて特に気になったことは何ですか？

両親が仕事やボランティアなどへ出掛けているため、さびしい思いをする子どもが多かったのですが、その子の友達もどんどん仮設住宅に移っていき、遊び相手がボランティアの人だけという状態になっていました。さびしいので引っ付いてくる、それを見ていつまでも一緒に遊んであげたいという気持ちがわきました。しかし両親が帰ってきたときの子どもの笑顔を見ると、自分では負けた。やはり両親の存在が一番であるのだとわかりました。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

まず学生の反応が学生一斉メールによって変わったことですね。「ボランち。」の掲示板や、PoNPを見てくれるようになったのがうれしいです。また、学生がボランティアに興味を示すようになったこともうれしく感じます。ボランティア募集の時期がテスト期間と重なったため、人の集まりがやや悪く感じ

ることもありましたが、3・4年生を中心に500人近くの学生が実際に刈羽でボランティア活動してくれました。お忙しい中本当にありがとうございました。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

活動する前は自分が人のためになるなんて思いませんでした。でも「また来てね」「明日も来るの？」と言われたとき、自己満足かもしれませんが、私にもできる、私でも力になれると思いましたね。

活動していて気になったことは現地で目で肌で得た情報と、テレビやラジオなどで流れている情報のギャップです。現地活動するには情報の速さが大切なのにテレビやラジオなどで流されている情報は圧倒的に遅い、と感じました。

またボランティアが誰にとっても必要であるのかということです。相手が望んでいないことを良いことだと思えるボランティアほど厄介なものはない、それを気をつけていかなければならないと思いました。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

ボランティアは敷居が高くなく、ほんの些細なことでも小さなことでもボランティアになります。今やれることはたくさんあります。これからも「ボランち。」をよろしくお願いします。

田辺 翔弥

Syo-uya Tanabe

工学部 福祉人間工学科 1年

コミュニケーション能力に優れ、初対面の人とも仲良くできる才能を持つ。何故か同期にも敬語を使う。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

まだ部屋で寝ていました。テレビの上に置いてあったCDが落ちてきて目を覚ましました。水と電気は大丈夫だったのですが、ガスが止まっていました。ずっと直らなかったのでガス局に電話して直し方を教えてもらって直しました。

■まず何をしようと思いましたか？

何が起きたのか分からなかったので、まずテレビをつけて情報を仕入れることにしました。そしたら中越沖で大きな地震が起きていることが分かりました。最初は携帯電話が通じず、連絡が取れなくて困りました。しばらくしたら通じるようになって、連絡が取れました。

■大学内ではどのような活動をされましたか？

本部で記録係として、災害情報や現地ボランティアセンターの動き等を時系列にまとめたり活動日誌を書いたりしました。そのほか救援物資募集のポスター作りや、カウンターで対応の仕事をしていました。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

自分が予想していたよりも多くの方がボランティア。に来て、現地へボランティアとして行ってくれて、良かったです。また、学内からたくさんの支援物資が集まったのも嬉しかったです。

■自分でボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

実際に現地には行かず、大学内での活動をしていました。地震が起きたときはボランティアに入ったばかりだったので、ほかのスタッフにはいろいろと教えてもらいました。少しは役に立てて、良かったと思います。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

今回は学内での活動が中心だったので、自分で現地に行ったり、体を使って体験するボランティアをしていこうと思っています。また、より多くの人にボランティアのことを知ってもらうためにポスター作り等に力を入れていきたいです。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

今まで以上に、たくさんの人にボランティアのことを知ってもらい、ボランティアに興味を持ってほしいです。気軽にボランティア。カウンターに来てほしいと思います。

自分が予想していたよりも
多くの人ボランティアに
来た。
よかったです。

安本 典生

Norio Yasumoto

理学部 物理学科 4 年

2004 年にボランティア。の前身である震災ボランティア本部のスタッフとなる。軽い気持ちで入ったが、どっぷり浸かってしまった一人。いつも、ボランティア。をかき混ぜようと企んでいる。

■地震が起きた時、何をしていましたか？

レポートを書いていました。発生した瞬間、ひょっとしてと思いすぐに机の下に隠れました。発生後は TV をつけたり、実家に電話をしたりしましたね。その後すぐに、ボランティア。スタッフに安否確認のメールを送信しました。連絡が取れないスタッフには連絡を取り続けました（笑）。たまたま、大学が開いていたのでボランティア。カウンターに行き、すぐ活動できる体制をとりました。

■まず何をしようと思いましたが？

まずは、ボランティア。に直行し、活動できる体制を作ろうと思いましたが。僕は 2004 年の東日本大震災の際も活動をしたので、そのとき得たスキルを後輩に伝えようと思いましたが。実際の災害はシミュレーションとも違いますし、ボランティアセンターに行ったことがないと、必要な書類も分からないでしょうね。

■大学ではどのような活動をされましたか？

後方支援を行いました。まずは、ボランティアに行きたいという学生を受け入れるため、大学側にバスの交渉をしたり、ボランティア登録をする際に必要な書類の作成を行いました。また現地に行っているスタッフや学生ボランティアが安全に活動できるよう本部で毎日情報収集を行いました。広報活動として機関紙『がんばってます！！新大』を発行し、学生だけではなく大学職員もボランティアをしているということを広めました。

■大学内で活動されて、特に気になったことはなんですか？

広報活動の必要性のアピールができていなかったことです。学生はもちろんスタッフにも必要性がアピールできなかったのではないかと思います。

またボラんち。スタッフの間にもボラんち。の活動に対して温度差があります。ボラんち。の活動は好きなことだけではないということを知ってほしいです。今後、後方支援の必要性をスタッフに対し、熱く語りたいですね。

■新潟県中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

中越地震の時は1年生でしたが、今回は4年生です。どうやって後輩スタッフに教えたらいいのだろうかということを常に考えていました。自分が全てやらないようにしました。自分でやったほうが理解しているので早いのですが。

■これからどのような活動を続けられますか？

まずスタッフで反省会をしたいです。やりっぱなしはよくないですね。そこで、今後やることを考えたいです。緊急体制時にインターネットを使ってスタッフ間で連絡がとれるよう、しっかりと教えたいです。

■大学生、学内の人達へのメッセージはありますか？

ボランティアは偽善者と思われる方がいらっしやるかもしれません。しかし、ボランティアをすることで社会にもまれる機会

を得ることができます。普段学生の中で常識なことが社会では通じない。これはよくあることです。そういった社会にできる機会をボランティアで提供することができると思います。ぜひ、ボランティア活動やボラんち。の活動に加わって下さい。

どうやって後輩に伝えたらよいか、
ということを常に考えていました。

！注意！

正規版には、ボランチ。スタッフの新聞報道記事が掲載されています。正規版にてご覧下さい。

§5 新しい顔

災害ボランティアコーディネーターは想像以上に大変なものです。しかしコーディネーターをすることによって、新たな仲間が生まれます。

佐藤 啓輔

Keisuke Sato

工学部 機械システム工学科 2年

本部での広報活動を中心として、刈羽でのボランティア活動にも参加。被災地での焼き芋イベントを企画した。

自分の力を生かせるボランティアをして、自分も成長していけたらいいな
と思います。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

地震が起きたときはアパートの部屋で寝ていましたが、揺れに気づいて起きました。しかし寝起き直後で頭が働かず、何もすることができませんでした。そのときの部屋の状況はというと、本棚から10冊ほど本が落ちてきたぐらいでした。

そして揺れが落ち着いた後、テレビをつけて地震の震源地の確認をしました。昼食をとったあと、大学の図書館へ向かいましたが、「棚から本が落ちる危険があるため、本棚に近寄らないように」という放送が流れたのを聞きました。それと、親に連絡はしませんでした。特に無事だったことを報告しなくてもいいなあと思ったからです。

■まず何をしようと思いましたか？

何も考え付きませんでした。逃げ道を作っておこうとか、保存食を買い足しに行こうなども思いませんでした。まあ何とかなるだろう、と考えていました。

■被災地の現場でボランティア活動をするとしたら、何をしたいと思いますか？

テレビで避難所の様子が映されたのを覚えているので、自分もそこで何かしようとは思いますが、実際何をすればいいのかはすぐには思い浮かびません。テレビでの報道に関連にして言うと、壊れた家が映っているのをみて、『自然災害だからまあ仕方ない、大変なんだなあ』と思っただけでした。ちなみに地震が起きて救援活動をしていた頃は、ちょうどテスト期間中だったため実際に現地に行こうとは少しも思いませんでした。

■ボランチ。がこの地震に対して緊急体制をとっていたことについてどう思いますか？

そもそも自分は談話室に来ることが少ないため、そういう体制を取っていたこと自体知りませんでした。そのため、PoNP や掲示物や救援物資の存在も知りませんでした。しかし刈羽ボランティアセンターに向かうシャトルバスがあるということは学生メールで知りました。それでも自分は『よし現地に行こう』とは思わず、特に行動に移しませんでした。ただ、本当に学生メールはすごいと思います。

結局のところ、私はバイト情報や授業に関する掲示など関心のある情報は見ますが、ボランチ。の掲示は見なかったため、緊急体制のことについてはよくわかりませんでしたね。

■ボランチ。にこの時期に入ろうと思ったのはなぜですか？

私は大学に入学してからサークル等には入っておらず、でも何かやりたいと思っていました。そこで、運動部だと途中から入部しづらいのですが、ボランチ。はあまりそういう抵抗を感じず、入りやすそうだと思ったので、ボランチ。に入ろうと思いました。他のボランティア関係のサークルではなく、あえてボランチ。に入ろうと思ったことには理由があって、他のボランティア団体はどのようなことをしているのかよく知らなかったし、存在自体知らなかったからです。それに、柏崎の友達がボランティア活動をして、人の輪が広がると話していたので、素敵だなあと思ったし、自分もボランティアをやってみようと思ったからです。

■今のボランチ。について、気になることはありますか？

その前にわからないことがたくさんあるため、これから学んでいかなければならないと思っています。話しかけやすい先輩にまずは聞いていきたいです。それと、スタッフの人たちは仲がいいですね。いい雰囲気だと思います。

■今までのなかでボランティアをされて、どんなことを感じましたか？

小学生のとき、落ち葉を集めて焼き芋をつくるボランティアをしたことがあり、自分も楽しめてよかった記憶があります。でもそれ以来ボランティアというようなことはしていません。これからは自分の力を生かせるボランティアをして、自分も成長していけたらいいなと思います。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

被災した現地へ行って活動してみたいです。ボランチ。内では掲示物の管理やポスター作りなど、広報の仕事をしていきたいです。カウンター業務やホームページの作成、管理の仕方も覚えたいです。プロジェクトとしては、「落ち葉de焼き芋」プロジェクトを考えています。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

ボランティアは楽しいことなんだとみんなに知ってほしいです。皆さんこれからもよろしくお願いします。

作田 隆則

Takanori Sakuta

工学部 電子電気工学科 2年

おっとりとしているが、ボランティア。での活動はしっかりこなす、仕事人。今後の彼の活躍に乞うご期待！

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

家にいました。家具が揺れていたので押さえていましたね。その後は、地震の情報をテレビニュースで見っていました。中越地震と同じようなことが起きてしまったか・・・という気持ちでした。

■まず何をしようと思いましたか？

まず、友達と連絡をとりました。メールは、送信はできましたが、すぐに受信ができなくなりましたね。

■ボランティアに参加したきっかけは？

出身は石川県なのですが、春に能登半島で地震が起きました。そのときボランティアの申し込みをしたのですが、県外のため参加できませんでした。そのときにとても悔しい思いをしたので、中越沖地震のボランティアに参加しました。でも、テストがあったので、参加するのが遅くなってしまいました。

■ボランティア。に入ったきっかけは？

ボランティア。という団体は知っていましたが、ボランティアと関係がある団体だという程度でした。しかし、ボランティアに参加してみても、ボランティア。スタッフの雰囲気が良かったことや、ボランティアに参加する人のお手伝いをしたいと思うようになりました。そんな理由で、ボランティア。のスタッフになりたいなと思いました。

■現地でどのような活動をしましたか？また何を感じましたか？

生活物資の配給手伝いや談話室で被災者の方とお話をしました。被災者の方と触れ合っているうちに、逆に元気をもらったような気がしました。とても明るくふるまってくださったことが印象的でした。初めてボランティアに参加したのですがとても良い経験になりました。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

災害に備えて学生に対策をしてもらえような活動をしたいです。でも、その前に自分の知識を増やしたいです。それから多くの学生に広められるような活動を行っていきたいです。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

一人でも多くの方にボランティアに参加していただきたいです。きっと、参加することへの不安はあると思います。僕もありました。でも、参加することでボランティアの印象は変わると思います。ぜひ体験して頂きたいです。

被災者の方と触れ合っているうちに、
逆に元気をもらったような
気がしました。

吉原 なつ美

Natusmi Yoshihara

人文学部 行動科学課程 2年

主に広報活動を行う。得意な絵を生かしてポスター作り等で活躍。ボランち。専属デザイナー

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

家にいました。地震が起きてすぐ、家族で家を飛び出しました（笑）。その時に隣の市の放送が聞こえて、詳細を知りました。私の地域では何も警報が放送されなかったので、地域ごとの格差を感じましたね。

■救援物資を寄付した理由は？

現地には家族の反対もあり、行けませんでしたが。でも、困っている人に手を貸したいと思っていたときにボランち。で救援物資を集めていることを知りました。被災地では救援物資を個人からでは受け付けなかったのが助かりました。救援物資は家にあるものや買ったたりして集めました。

■ボランち。に入ったきっかけは？

ボランち。スタッフが不足していることを聞いて、現地には行けないけれど力になればいいと思いスタッフになりました。ボランち。ではおもに得意分野をいかしてポスターを作りました。色使いを目立たせて、目を引くようなポスターを作りました。

■大学内で活動されて特に気になったことは何ですか？

ボランち。で掲示している情報が古いということ、ポスターが目を引きかないというところ。どのように改善していこうか、今考えているところなのです。

■前回の新潟県中越地震の時と、対応の仕方は変わりましたか？

中越沖地震の方が揺れましたね。地震発生後、避難道具を用意して備えました。でも、父はそんなのはいらないと言っていました。家族の中でも意識の差があるということを知りました。家族の中でもこんなに意識差があるということは他の方も意識差があるということですよ。

■これからこういった活動をしていこうと考えていますか？

できる限りのことをしたいです。特に得意な絵で目立つポスター作りをしていきたいです。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

特技を生かして人の役に立てることはすばらしいことだと思います。ぜひ、ボランち。で特技を生かしてボランティア活動してみませんか？

特技をいかして人の役に立てることは
すばらしいことだと思います。

齋藤 梨絵

Rie Saito-

教育人間科学学部 生活環境科学課程 1年

1年生ながら精力的に仕事をこなし、先輩顔負けの行動力を持つ。マイブームはローソンのポイント集め。

■地震が起きたとき、何をしていましたか？

バイトに向かう電車の中にいました。電車がちょうど新潟駅のホームに着いたときに地震がありました。しかし私自身は、地震があったことに気づきませんでしたね。電車の揺れと地震の揺れが同じように感じたからです。駅の構内放送で地震が発生したことを知りました。ホームの中は特に混雑していませんでしたよ。

ホームや新潟駅前でも特に変わった様子はなく、地震による混乱が起きていませんでした。バイト先のお客さんが地震の話をしていることを耳にして、そのとき「ああ地震って本当にあったんだな」と実感しました。

■何をしようと思いましたか？

地震が起きたこと自体を把握していなかったもので、特に何か行動を起こしたりはしませんでした。ただ、電車の立って乗っていた人が地震の揺れでよろけたので、何かあるのかな、という意識はありましたね。

■現地へボランティアに行くとしたら、どのような活動をしたいですか？

力仕事でもなんでも、自分ができる範囲のことなら何でもしたいと思っています。避難所でしたら、食事の配膳とか、そこに避難している方の話し相手などです。引越し作業のお手伝いもできる限りしたいです。

■今までの人生においてボランティア活動をしたことはありますか？

中学生の時、友人と一緒に老人ホームでボランティア活動をしたことがあります。ホームに入所している方の食事の世話や、話し相手をしました。直接人と接するボランティアだったため、入所者との関係づくりなどで苦労しましたが、楽しそうにしてくれているのを見たときは、やってよかったと充実感を覚えました。

大学生となった今も、このような分野のボランティアがあれば参加していきたいと思っています。

■これからボラんち。においてどのような活動をしていきたいと考えていますか？

入ってきたボランティアニースをコーディネートすることはもちろんですが、自分もその新しいボランティアに参加していきたいです。いろいろなボランティアをしたいと思っています。

学内においては、窓拭きボランティアをしたいです。特に私の所属する学部棟の窓は、空自体が汚れて見えるほどなので、きれいにしたいです。

■学生や大学の人たちにメッセージはありますか？

自分でできる小さなことは、自分でやってほしいです。例えば、自分で出したゴミは自分で捨てて放置したり投げ捨てたりしないことです。そういう、人として当然のことを当然にやってほしいです。

ボラんち。の皆さんに対しては、本当に、いろいろ優しくして下さってありがたく

思っています。みんな「いい人」ですね。

自分でできる小さなことは、自分でやってほしいです。

！注意！

正規版には、ボランチ。スタッフの新聞報道記事が掲載されています。正規版にてご覧下さい。

§6

そして、これから

震災復興はまだ始まったばかり。我々に何をすべきか。学生は何ができるか。そして、何をやりたいか。

2 歩先へ、、、

～これまでの活動を振り返って～

天野 聡士 (カウンターマネージャ)

■地震発生

平成 19 年 7 月 16 日午前 10 時 13 分、震度 6 強の地震発生。マグニチュード 6.8、震源は新潟県上中越沖。

どうしてまた新潟が…。

どこからとも無くそんな声が聞こえてきそうな出来事でした。正直なところ、こんな短期間に震災が 2 回も起きるとは夢にも思っていないませんでした。中越地震の傷跡がまだ残る中越での地震。これは、新潟大学学生ボランティア本部にも大きな影響を与えるような出来事でした。

■ボランち。の活動

平成 16 年に発生した新潟県中越地震の時に発足した、新潟大学学生ボランティア本部「ボランち。」もともと震災関連のボランティアコーディネートを行なう団体でした。昨年の学生団体化に伴い、環境、福祉、地域など幅広い分野に手を広げて活動しています。しかし、前述の通り「震災関連」を全面に出してきた団体を今後、どうシフトさせていくのがボランち。の抱える大きな悩みでした。

そんな中起きた中越沖地震。ボランち。のスタッフは地震発生直後にカウンターに集合し、情報収集、資料作り、災害ボランティアコーディネート方法の構築などの作業を「派遣班」「記録班」「つながり班」「情報班」に分かれて行ないました。

そして、次の日から本格始動。新潟大学学生ボランティア本部「ボランち。」の激動の日々が始まったのです。

■ボランティアコーディネート

「ボランち。ってどんな団体なんですか?」。よくある質問です。一番短い答えは「ボランティアコーディネート団体です。」。正直言って「それ何?」と思う人が大多数を占めるでしょう。ただ、この仕事が無ければボランティアは始まりません。

例えば、新潟大学となじみの深い、刈羽村災害ボランティアセンター。もし、刈羽村ボラセンが無かったら、ボランティアをお願いしたい人、やりたい人はどこへ行けばよいのでしょうか?この一組織が「ある」と「ない」では復旧復興に大きく影響するのです。

ボランち。も大学の中のボラセン。こんな感覚ならわかりやすいのではないのでしょうか。

ボランち。では地震発生翌日からこんなボランティアコーディネートを行なってきました。被災地の状況は時々刻々と変化するため、すばやい対応をとらなければなりません。今日の道路状況と明日の道路状況では全く異なってしまうのです。情報の網を張り巡らせ、大学とも上手く連携をとりながら行なってきたボランティアコーディネート。完璧とはいえませんが、及第点を与えてもよい出来だったのではないのでしょうか。

それと、現在でのボランティア登録数はの

べ500人を大きく上回りました。皆さん、本当にご協力ありがとうございました。

■ボランティアって…？

皆さんは、「災害ボランティア」という言葉を聞いてどのようなものを思い浮かべますか？引越しのお手伝い。瓦礫の撤去作業。力仕事ばかり頭に浮かんでいませんか？今回新潟大学として主に携わったのは「ピカピカ隊」という子どもの相手をするボランティアです。「あれ？」と思った方は少なくないでしょう。子供の相手がボランティア？何でだろう？誰もが持つ先入観から生じる疑問です。

その答えは、「やって欲しい人がいるから。」。ボランティアの幅は無限大に広がっているのです。

また、Volunteer とは日本語で志願兵という意味です。もちろん無理して行くことはありません。義務感を持つ必要もありません。

…ちょっと、やってみようかな

これくらい軽い気持ちで良いのだと思います。

「ボランティア=高尚な任務」という固定観念を取り除くこともボランティア。のやるべきことだと思います。ただ、実際にボランティアと言われるものに参加してみることが、ボランティアを知る一番の近道かもしれません。

■いざ、ボランティア。

ボランティアに参加する時、最初に行くのはボランティアセンター。実は、ボランティアセンターの運営に携わっている人たちもみなボランティアだということは、皆さんご存知でしたか？

もちろんボランティア。スタッフもピカピカ隊の他にこの運営スタッフにもなりました。

■支える。

「こうほうしえん」。これもボランティア。で行なっているれっきとした活動です。ただ、あまり表には出ないので認知度が低いのです。漢字で「後方支援」。実はこれが非常に重要な役割なんです。例えば、ボランティアが持っている情報を学生に伝える広報活動。そして、現地入りしている学生ボランティアのバックアップ。安心してボランティアに行くことができるのも、後方支援という存在があるからなんです。縁の下の力持ち。こんな言葉がよく似合う役割なのです。

■創る。

9月2日にボランティアセンターが縮小し、刈羽村災害ボランティアセンターから刈羽村ボランティアセンターになりました。ボラセンが縮小したからボランティアは必要なくなった、そんなことはありません。むしろこれからが本番と言っても過言ではないと思います。そして、ここからがボランティア。の力の見せ所です。

ここで重要となってくることは「創る」です。つまり、現地に入って学んだこと、感じたことを形にするのです。これがボランティア。ならできるのです。

現在、行なっている「ふれふれ隊」。これは、ボランティア。とNPO法人「虹のおと」との共同プロジェクトです。これも、被災地からの声によって生まれたものなのです。

創造性と行動力さえあれば何でもできる。失敗なんて恐れない。

ボランティア。でしか味わうことのできない「おいしさ」なのです。

■未来へ

ここまで地震発生からのボランティア。の活動を大まかに書いてみました。なんとなくわかってもらえたでしょうか？

さて、最初の方で「今後、活動をどうシフトさせていくかが悩み」と言いました。よく考えてみると、やりたいことが何でもできるボランティア。ならではの贅沢な悩みなのかもしれません。その悩みの答え。それは、今のボランティア。の性格を今後も継承していくことなのではないかと思います。特に、活動の多様性とユニークさ。震災関連を始めとして、環境、福祉、地域などこんなにバラエティに富んだ活動をしている団体は日本全国を見ても類を見ません。しかし、ただただ継承するだけでは何の発展もありません。

もう2歩先へ…

次の一步を考えるとということはよく掲げられる目標です。そんなありきたりな言葉ではボランティア。の未来は表しきれません。それぞれの分野において、2歩先を見越した思い思いの活動を行っていく。もちろん活動に制限を加えたり、無駄な干渉もしません。大学生が持つ、豊かな創造性と行動力を駆使した活動を展開していく。これが、新潟大学学生ボランティア本部「ボランティア。」の未来の姿なのです。

■さいごに…

実は、新潟県中越沖地震の起こる2週間ほど前にボランティア。では、大きな地震を想定した「災害シミュレーション」を1週間程度を費やして行なっていました。正直なところ、これを行なっていたから今回は迅速な対応がとれたのだと思います。逆に、もし「災害シミュレーション」を行なっていなかったら…と考えると背筋も凍る思いです。これも運命。もしかすると、このときだけ、2歩先の未来を考えることができていたのかもしれませんが。これは、未来のボランティア。の行く末を予知した出来事だったのでしょうか。その答えは、近い将来のボランティア。に表れることでしょう。

§7

一緒に活動した道具たち

ボランティアコーディネートをするためには、様々な道具が必要です。ボランち。が作成した一部をここで紹介します。

！！注意！！

正規版には、「ボランティア受付カード」等のボランち。で活用したフォーマットを、また同じようなことが起きた際、すぐに使えるように掲載されています。正規版にてご覧・ご活用下さい。

編集 中越沖地震ボランティア活動報告書編集委員会

執筆・インタビュー 中越沖地震ボランティア活動報告書編集委員会

中越沖地震ボランティア活動報告書編集委員会 (50音順)

安本 典生 (編集代表)

斎藤 梨絵 (報告会プロジェクトリーダー)

福野 陽平 (報告会プロジェクトリーダー)

森田 薫夫 (報告会プロジェクトリーダー)

佐藤 啓輔 (報告会プロジェクトリーダー)

天野 聡士

小林 拓実

高田 康宏

松本 健一

泉 和恵

小林 由李

田辺 翔弥

三木 春香

柿沼 美波

近藤 彩野

中井 美紗

山口 正晃

久保田雄紀

作田 隆則

藤本 隆太

吉原なつ美

災害ボランティア報告書

～新潟県中越沖地震ボランティア活動のあしあと～

中越沖地震ボランティア活動報告書編集委員会 編

平成 19 年 11 月 30 日 発行
発行 新潟大学学生ボランティア本部

〒950-2181

新潟県新潟市西区五十嵐 2 の町 8050 番地 新潟大学内

TEL : 025-262-7530 FAX : 025-262-6304

公式ホームページ : <http://www.nuvc.info/>

メールアドレス : gakuserv@adm.niigata-u.ac.jp

活動場所 : 新潟大学総合教育研究棟 学生談話室内